



始





56  
158

妊  
娠  
よ  
り  
分  
娩  
ま  
で

附無痛安産法と受胎制限法

醫學士高橋政秀  
醫師伊藤尚賢  
共著



56-158

醫學士 高橋政秀  
醫學士 伊藤尙賢  
共著

# 妊娠より分娩まで

附 無痛安産法と受胎制限法

大正  
9. 5. 21  
内交

發行所 東京 新橋 堂



凡例

一 妊娠分娩は婦人の大役であるが、婦人はこれあるが爲めに尊いものである。近來泰西の悪思想に驅られて妊娠を欲せざる婦人あるやに聞くが、それは以ての外のことであつて生物の大目的を無視するものと云はなければならぬ。

一 妊娠分娩は婦人の大役ではあるが、もとゞ生理的のもの故適當の注意を守れば無論母子共に安全なるものである。本書は此の適當の注意に就て詳述せるものである。

一 附録第一編には無痛安産法を記し、第二編には受胎制限法に就て詳述して居るが、吾人は時代の趨勢に鑑み、此の二問題に就て攻究し、その可否に就て深く日本婦人の注意を喚起すべき必要あるを思ひ、特

凡例

一



凡例

二

に編纂せるものであつて、此二編の責任は特に著者の一人なる伊藤の與るところである。

一、無痛安産法に就ては主として近江ドクトルの説を参照し、受胎制限に就ては嘗て衛生新報に連載せる松原露風氏の避妊新論を初め、諸家の意見を紹介せり、茲に謹んで此等の諸賢に敬意を表する次第である。

大正庚申歲春三月

著者謹識

# 目次

## 第一編 妊娠の生理と其攝生

第一章 妊娠はどうして起る乎……………一

三要件||妊娠の成立||妊娠し易き時期||生産數||各國の平均出産數||男女の分るゝ理由||  
動物試験||父母の年齢の關係||複胎の比例||複胎の出来る理由||妊娠補助藥

第二章 妊娠の母體に及ぼす影響……………九

子宮||卵巢||腰部及び骨盤部||月經||排卵作用||膈及び外陰部||浮腫||乳房||容貌||皮膚||  
||神經系||消化器系||泌尿器の變化||血行器の變化||呼吸器の變化

第三章 胎兒……………一六

第一 妊孕卵發育の状態……………一六

核の分裂||三葉となる||分裂球の發達||卵膜||胎盤||臍帶||羊水

第二 胎兒の發育……………二三

目次

一



目次

卵の發育 第一ヶ月 第二ヶ月 第三ヶ月 第四ヶ月 第五ヶ月 第六ヶ月 第七ヶ月 第八ヶ月 第九ヶ月 第十ヶ月 胎兒各月の體重計算法 身長の計算法 胎位 頭位 臀位 横位 斜位 姿勢 其診斷

第四章 妊娠はどうして分る乎 三

不確微 疑微 確微 早朝診斷 第一ヶ月 第二ヶ月 第三ヶ月 第四ヶ月 第五ヶ月 第六ヶ月 第七ヶ月 第八ヶ月 第九ヶ月 第十ヶ月

第五章 妊娠中の攝養法 三

妊娠は病氣では無い 帯の締め方と衣服 腹帯の利害 履物の注意 食物の注意 飽食の害 穀類 肉類 蔬菜類 果物 菓子 香料 飲料 住居の注意 起居動作の注意 旅行 身體の清潔 乳房の保護 便秘の手當 下痢の手當 小便の注意 便器の習慣を養へ 閨門の戒 精神の安靜 無駄心配をするな 妊娠中の藥用に就て 醫師の診療が必要 胎教

第六章 分娩に至る迄の時日 六

持續日數 法の規定 妊娠層 妊娠層の展開

第七章 お産の用意 六

第一 準備すべき品物 六

産衣の拵へ方 改良襦袢の拵へ方 産具の用意 産具の仕末 卍の使用は嚴禁

第二 産室の準備方 七

不良の産室 理想的の産室 産床の拵へ方

第八章 良産婆の頼み方 七

産婆の選擇は大切 良産婆の頼み方 最も確實なる方法 産婆を招ぶ時

第九章 お産の近いた徴候と其心得 八

お産の近いた徴候 家族の心得 産婆に任せよ

第二編 分娩の生理と其攝生

第一章 お産のいろく 八

分娩の種類 正規分娩 異常分娩 定期産 遲産 早産 流産 お産の輕重 お産と潮の干満

第二章 正しきお産の経過 八



目次

四

區別||前驅期||開口期||娩出期||産痛||後産期||お産の始まる時と終る時||お産に要する時間

第三章 分娩時の攝生法

九五

輕きお産||醫師を立會せよ||消毒は大切||消毒と新しいとは別||兩便を排泄せよ||分娩時の食事

第三編 産褥の生理と其攝生

第一章 産褥の生理

九九

産褥期間||生殖器の復舊||附屬器の復舊||惡露の排出||惡露は臭くない||乳腺の分泌||體重の減少||體温||脈搏||呼吸||發汗||兩便||食慾

第二章 産婦の攝生法

一〇七

攝生の一般||産後の清潔||衣服||臥床と産室||枕の注意||安眠||飲食物の選擇||兩便の注意||産後の體位||運動に就て||歩行を許す時||眼の使ひ方||乳房の保護||圍門の注意||精神の安靜||産後の月經

附録第一編 無痛安産法

一三三

研究者||無痛安産の希望者||苦痛を除く法||完成||其説明||時代の要求||無害なり||要するに今一段の研究を要す

附録第二編 受胎制限論

一三一

第一章 歐米に於ける受胎制限と新マルサス論

一三三

生産制限同盟會||其理由||マルサス論||新マルサス論

第二章 人口増加と社會問題

一三七

人口増加の利害||實戦の第一要件||人口の過剩は有利||人口過剩の弊||貧乏と犯罪との關係||賣淫と花柳病||貧富の軋轢を増す||食糧の缺乏||人口増加と人口防止

第三章 家族制限と社會改良

一五一

マルサス學說の承認||量よりも質の問題||多數の白痴||政策上よりの研究||住居問題||賃銀問題||早晩と晩婚||高尚克己の理想||徐々に念げ||家族制限の長所||死亡率の低下||理想の到達

第四章 妊娠制限と風教問題

一六九

第一 犯罪との關係

一七〇

目次

五



第二 酒癖との関係……………一五

第三 細民との関係……………一七

第四 男女の風儀との関係……………一八

第五 離婚との関係……………一八

第六 私生児との関係……………一七

第七 疾病との関係……………一九

第五章 一兒制……………一九

    醫會の回答||覺書の内容||衛生上無根據の説||特に注意すべきこと||第二の危険||新法を立て||拒絶の理由||自然の結果のみ||決論

第六章 人種改善學と受胎制限……………二〇

    人種改善學の見地

    第一 人種改善學の意義及び目的……………二〇

        人種改善學の意義||新學の鼻祖||遺傳統計學||才能の遺傳||境遇の力||ラマルクの説||メ

ンデル説||公平の見地||人種改善學の目的||區分||積極的人種改善學||消極的人種改善學||豫防的人種改善學

第二 人種改善學の應用……………二三

強制的改善法||歐米の例||去勢術||去勢術を施すべきもの||去勢術の必要||生殖慾と性交慾||去勢術實例の一||實例の二||實例の三||實例の四||ホックの説||未開種屬の慣習||日本婚姻法の制限||人種改善學の智識の必要||獨身の利害||獨身者は壽命が短い||獨身者の心身に受くる悪影響||獨身者に精神病が多い||早婚||早婚の害||晚婚の害||結婚に適當の年齢||結婚に適當の年齢と出産数との關係||人種改善學者の意見||分婍防止の方法||實生活上の顧慮||人口制限の方法||墮胎は罪惡||日本に死産者多し||色氣と食氣の衝突||墮胎の史實||西山侯の墮胎防止

第七章 種々の方面よりの觀察……………二六

第一 ツ博士の總括論……………二六

總括||意見の方面にて||實行の方面にて||社會の衛生は||風教は如何||結論

第二 避妊の實績……………二七

避妊と母體の健實||無智無識なる産兒制限||歐洲文明國の避妊||出産率減少の原因||避妊





胎児の正位置

目次終

目次  
の效果

第三 歐米に於ける最近の趨勢……………二七五  
 生江氏の觀察談 和蘭の公認受胎制限制度 其結果 佛國の現況 佛國では人口増殖の奨  
 勵 米國受胎制限協會と其宣傳 米國の國法及び州法 享樂主義と受胎制限 受胎制限の  
 可否 吾人の意見 放任せば避妊氣風を爲さん

第四 醫學上より見たる避妊法の弊害……………二九四

第八章 受胎制限を行ふべき場合と其方法……………二九七  
 五種の原因 必要なる場合 其方法 其選擇

八



# 妊娠より分娩まで

附無痛安産法と受胎制限法

醫學士 高橋 政 秀  
醫師 伊藤 尚 賢 共著

第一編 妊娠の生理と其攝生

第一章 妊娠はどうして起る乎

妊娠は如何にして起るか、妊娠の成立には如何なる條件が必要であるかと云ふに、これにはいろいろの要求があるが、結局左の三點に歸着するものである。

三要件

第一編 妊娠の生理と其攝生



立妊娠の成

妊娠し易き時期

妊娠より分娩まで

二

一、卵は健全に形成せられ、且つ充分成熟すること。  
 二、健全なる卵と健全なる精蟲と結合すること。  
 三、子宮は妊孕卵の保育に適すること。  
 以上の三點の中、一つにても故障ある場合には妊娠は成立しないのであるが、若し何等の故障無くして、月經時に卵巢のグラーフ氏胞が破裂するとき、卵がその中から抜け出て、男子の精蟲に逢へば、即ち胎兒を形成するに至るもので、その卵中にある蛋白質はその胎兒の營養に供せらるゝのである。

以上の如くにして受胎したる卵はどうなるかと云ふに、輸卵管にて會合したるものが、徐々に降りて来て子宮腔内に達し、子宮内の粘膜にくつついて、追々に發育して胎兒となる、即ち妊娠が成立するのである。以上の如く卵と精蟲と會合し、その他の條件が満足すれば、何時でも

生産數

妊娠は成立するものであるが、その中でも精蟲が子宮内に進入するに最も容易なるは月經後であつて、月經の直ぐ前は最も困難である、だから妊娠の目的を遂げしむるに最も利のあるのは、恐らく月經最後の日から十日前後の頃まで、あらう。

婦人の生殖年限即ち月經の開始から閉止までの三十箇年の間は、機會だにあらば何時にても妊娠し得るものであるが、一度妊娠すると、妊娠分娩、哺乳を通じて約二ケ年の間は、妊娠は休止して居る、その他病氣等の爲めに休止の場合も、少くないから三十ケ年の間に妊娠すべき時期は、餘り多くはない。社會學者の研究によると、一夫婦につき産兒十乃至十一人位であらうと云ふことであつた、尤も中には一人も産まないものもあり、また三十二人の子を産んだ人もある、これは今日世に知られて居るものゝ一番に多い數である、尤も我が徳川將軍家の中には四



各國の平均出産數

妊娠より分娩まで  
 十幾人と云ふ子持の人もあつたが、これは數多の妾腹を混じてのこと  
 て、一人の腹ではない。通常一人の妊孕力は十乃至十二人と見れば差  
 支ないのであるが、生活狀態その他の關係によつて平均數はこれより  
 は甚だ少い、各國の統計を見ると、一夫婦の出産平均數は、

和	蘭	四八八	諾	威	四七〇	
瑞	典	四五二	普	魯	四六〇	
丁	抹	四一八	英	吉	利	四三三
白	耳	義	佛	蘭	西	三四六
		四二三				

男女の分る理由

となつて居るが、此の中では目下受胎制限を盛んに行つて居るところ  
 もあるから、其等の國即ち和蘭佛蘭西などは、此の數よりも少いかも知  
 れぬ。  
 同じく妊娠して、それが男となり女となるは如何なる理由であるか

動物試験

と云ふに、これには未だ定説がないが、古き産科の書物なる産育全書に  
 は、血先づ至りて精を裹むものは即ち男となり、精先づ至りて血を裹むも  
 のは即ち女となるもあり、また右の子宮に孕めば女子、左の子宮に孕め  
 ば男子となると云ふ説もあり、サーリー氏はまた、交接受孕の時期に關  
 すると云ふ説を持つて居る、氏の説に據れば、此の試験は動物に徴すれ  
 ば分明である、即ち交尾期の始めに於て受孕すれば、女性を生じ、終りに  
 於て受孕すれば、男性を生ずると云ふのである。  
 蜂の卵を産む時には、初めに産まれたのは雌蜂となり、後から生まれ  
 たのは雄蜂に解へる、又牝鶏の卵を産むにも、これと同じく、始めに生ぜ  
 るのを解へせば、牝鶏となり、後に産みたるを解へせば、雄鶏となる。又  
 牝馬のサカリついた時に遅く牝馬をかけるすると、大抵牝を産まずし  
 て牡を産むとのことであるから、此等の實例からして、サーリーが、牧畜



父母の年齢  
との関係

妊娠より分娩まで  
六

家の人々に若し牛馬の牡を得ようと思ふたならばサカリの時の終りにかゝらせ、牝を得るには其初めにかけてさするがよいと教へたので、諸處の牛飼馬飼は、此の教へに随つて牝牡を心の儘に擧げ得たとのことである。そこで此等の説を根據として、サーリー教授、米國のホリック博士、英國のバツクマン博士などは左の斷言を下して居る。

(イ) 儲に女の子を設けるには、月經時の一番終りの日にばかり交合するか、又は月經が停んで、初めの二日の間に交合すべきである。

(ロ) 儲に男の子を設けるには、月經が停んでから六日の後に交合するがよいと。

次に父母の年齢と生兒男女との關係に就て、ホーフアツケルとザツトルの兩氏は、兩親の年齢中父の高齡なるときは男性を生ずること多く、兩親同齡なるときは稍多く女性を生じ、女子高齡なるときは女性

例  
複胎の比

を生ずること多いと云ふて居るが、此等の諸説は未だ定説とするまでに確かめられては居らぬ。

次に雙胎兒はどうして出来るかと云ふに、雙胎兒とは、兩兒が同時に生れて同年なるものゝこと、三ツ兒即ち品胎は三兒に同時に生れるもの、四兒以上皆之れに準ずるのであるが、ケ、フ、アイト氏の統計によると、八十九回の分娩に一回の雙胎兒を見るの比例になつて居るが、三胎四胎に至つては之を目撃すること極めて稀である、即ち七千九百十回の分娩中漸く一回の品胎あり、三十七萬千二百六十六回中一回四胎を目撃する比例になつて居る、またウワサリー氏は六胎分娩を實驗したとの報告がある。

雙胎兒は、二ヶの卵同時に妊孕せるによることもある、さうしてその卵は一個の濾胞から來ることもあれば、二個の濾胞から來ることもあ

複胎の  
來る理由



る。或は一個の卵内に二個の胎兒基礎を生ずるに因ることもある。此の場合に於ては男女の性は雙胎必ず同一なるが普通である。尤も二卵性の場合は別である。そして雙胎の一卵に生じたときには、卵膜胎盤等は各胎共有になつて居るが、二卵性の場合には、各卵各異なる胎盤卵膜を有するので分る。

二卵性雙胎は、一回の交接によつて妊孕することもあり、或は數回の交接によつて生ずることもあるが、第一妊孕卵の既に子宮内に沈着した後、次の排卵期から来た第二卵の妊孕せしものにあつては、一兒は充分に發育して他の一兒は著しく小さい、尤もこれは度々あることではない。一體卵は妊孕してから十二週を経ると子宮腔を充盈し、且つ眞脱落膜と翻轉脱落膜と癒着するものであるから、復胎を生ずべき時間は甚だ僅少である。

世間に子孕み薬即ち妊娠補助薬なるものがあつて、之れを服すれば何十年の石女も立ち處に妊娠するやうな廣告をして居り、相當學問あるもので之を信ずる向きがあるやうだが、これは甚だ怪しむべきことである。今日の藥理學上決して子を孕ませ得べき藥物とは一つも無いのである。不妊の原因はいろいろあつて、到底藥物の力で如何ともすることの出來ぬもの故斯様のものは決して信ずべきものではない。

### 第二章 妊娠の母體に及ぼす影響

妊娠中に母體に種々の變化が起るが、その中最も影響を受くるは生殖器と之の周圍である。以下少しくこれに就て説明を加へよう。子宮は最も強く其容積を増大し、小骨盤を出て腹腔に上昇し、妊娠の末期に近づけば、其増大が諸方に向つて強く腹壁を膨脹せしめ、著



妊娠より分娩まで

しく腹圍を延大ならしむるものである。

處女時代には子宮は六―五

仙米突乃至七仙米突

(二寸三分)の長徑を有

するに過ぎないが妊

娠末期に至れば三十

五乃至三十七仙米突

(二尺二寸)の長さとな

十四乃至二十六仙米

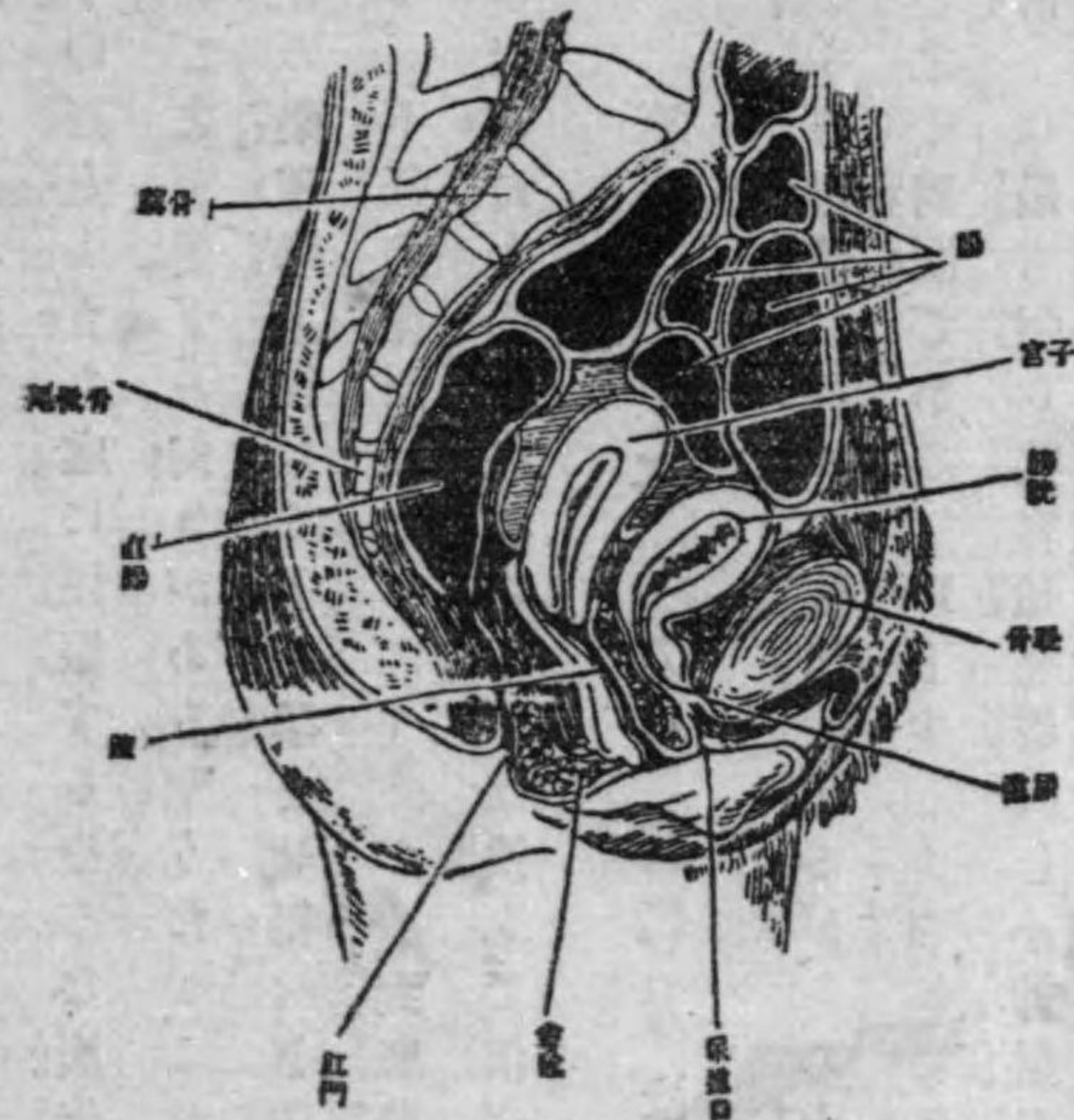
突(二寸六分)の廣さと

二十三乃至二十四仙

米突(七寸九分)の厚さ

を有すその内容は處

婦人生殖器解剖圖



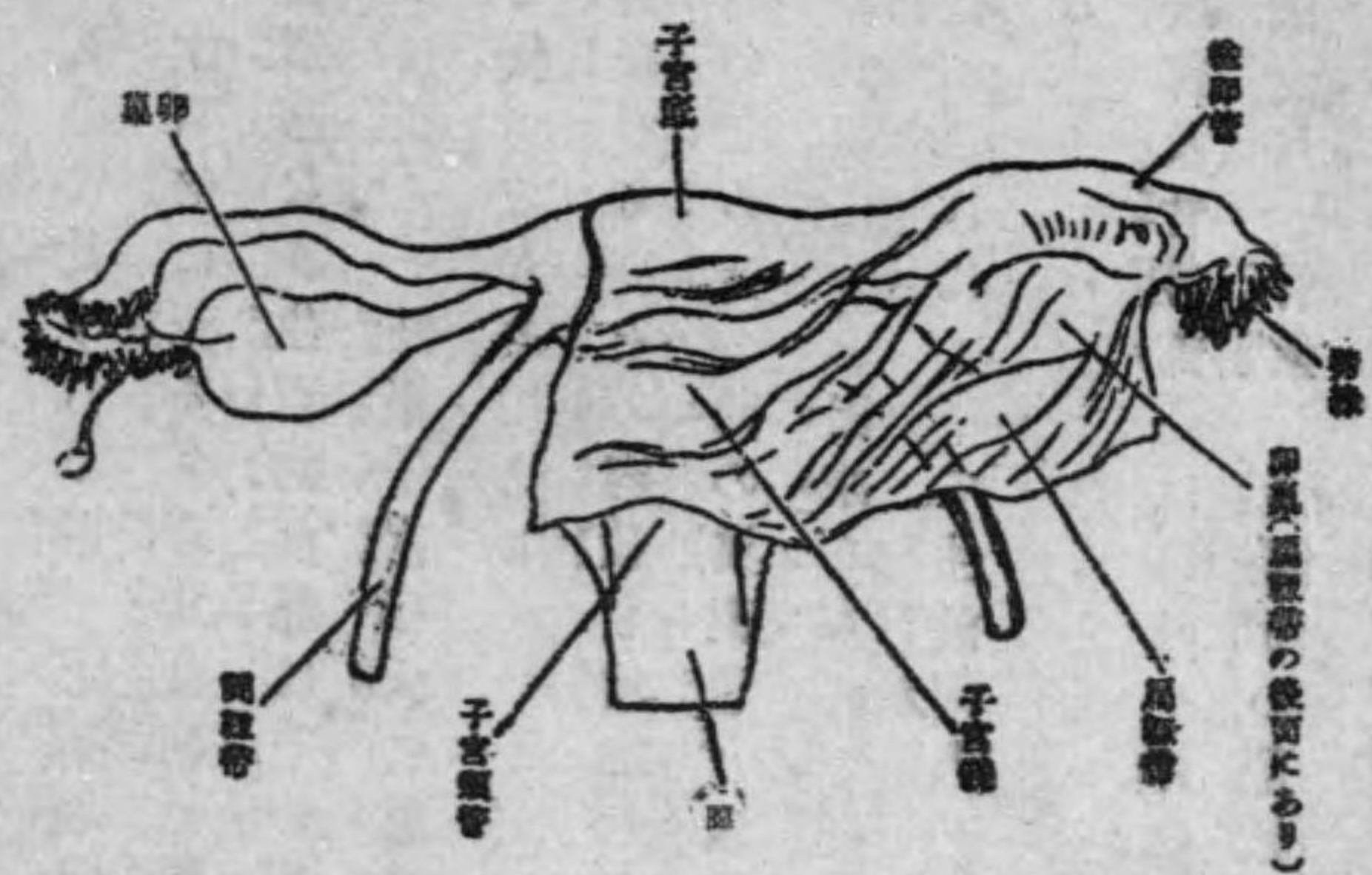
女のものに比すれば殆んど五百十九倍に膨大し、その重量は  
至二十四倍に至る。形状は初め梨子状から次第にその形を變じて類  
卵圆形となり、生理的前屈はその度を増し、その體と底部は前腹壁に接  
するに至る。妊娠子宮は大に移動し易く、體位の變換に應じて、その位  
置を變ずるものである。

卵巢も亦その容積を増加し、左右何れか一側の卵巢に眞黄體を見  
るものである。此の眞黄體と云ふのは、卵巢のグラッフ氏胞から出た  
卵が妊娠すると出来るもので、妊娠しなければ出来ぬから、屍體解剖の  
場合に、これによつて生前何人の子を生んだと云ふことが判るもので  
ある。

腰部及骨盤部は、三四ヶ月の頃からして脂肪の沈着によつて豊圓  
廣潤となり、骨盤の諸關節は漿液滲潤により弛緩して移動し易くなる。



婦人内生殖器圖



妊娠より分娩まで

一一一

月經は、妊娠すると共に全く閉止し、産褥期若しくは授乳期を終へた後再び來潮するは普通であるが、時として受胎第一ヶ月に於て、一回乃至二三回の出血を來す事がある。排卵作用は、妊娠中常に停止して居る。

膣及外陰部は、妊娠卵の發育と共に、血液の流通多きを加へるので、溫暖の度を増し、且つ帶青赤色を帯び分泌液も亦増量し、大陰唇口は、時として靜脈管の怒張を見

ある。

浮腫 妊娠子宮が血管を壓迫する爲めに、下肢、下腹、外陰部に浮腫靜脈の怒張、靜脈瘤の生ずることもある。

乳房は、妊娠第二ヶ月から漸次膨大緊滿を始め、時日を経過すると共に益々著しく、乳嘴暈には茶褐色若しくは黒褐色を呈する、さうして五六ヶ月の頃に至り、之を壓搾されば稀薄なる透明水様の液を分泌する。

容貌 婦人一たび妊娠すれば、豊頬媚態花の如きも、その多數は色衰へ、色澤褪せ、皮膚には弛緩を來し、蒼白若しくは黄色の鈍き色を帯び、眼の周圍には丁度臙脂を濫用せる人の晩年の様に、青色の輪を帯び、數月の後には、反り身を爲して歩行するやうになる。

皮膚は、所々に青色を呈し、漸次時日を経過して腹部の膨滿すると



共に下腹部の中央に褐色の縦紋を生じ又緊張の爲めに披裂を生じて、所謂妊娠線なる線を生ずるが此の線は分娩後は唯その色が白色に變ずるだけで永久に消散することはない。

神経系の變化として頭痛齒痛腰痛關節痛その他の神経痛を發し、全身倦怠を覺え常に逆上の氣味にて夜間安らかに眠らず視力弱り耳鳴り事も無き時に哀み時に憂ひ或は又忽ち喜び樂しむ等兎角氣心變り易く丁度我儘者の舉動のやうになるが多くの人に就て見るに何れかと云へば快活となるよりは寧ろ氣鬱に陥るものが多い尤も此の變状は萬人が萬人悉くさうなるといふわけではない或る人は少しも平常に變りのないのもあればまた他には病氣のやうになるものもあるが多きは一時性のもので長く残つては居らない多數の婦人殊に初妊婦は妊娠の初めには妊娠に對して一種嫌惡の感起し或

介意しなかつたものも今や胎動を感ずるに至れば胎兒の生存を自覺すると共に俄然自ら母たるの感情を起し兒を愛するの感情と思考との爲めに困苦と恐怖とに堪へる勇氣を振ひ起すに至るものである。消化器系の變化は惡心嘔吐を催し易くなり兎もすれば秘結を起し時としては唾液の分泌著しくまた平素好まざる食物を反つて欲しくなり或は通常食すべからざるもの例へば生米炭灰生野菜等を食するものがある一般に消化の力は衰ふる方が多い。

泌尿器の變化は尿意頻繁となり屢便所に通ひ甚しきは夜分など自然に洩れ出づることがある殊に妊娠末期に於て甚しいものであるが排尿に臨んで下腹を兩手に持ち上げてすると充分膀胱内の尿を排泄し盡すからいくらか排尿の度數を減ずることが出来る。血行器の變化は血液の循行に變化を來すが爲めに亦心臟の機能



妊娠より分娩まで  
も増進する結果として心悸亢進、胸内苦悶、眩暈、吐血等を起し、また静脈の壓迫せらるゝ爲めに、血液の還流を妨げられて、下肢に浮腫を來すこともある。

呼吸器の變化は、甚だ僅少で、唯腹部の膨大の爲めに壓迫を受けて、呼吸促進を來すものである。

### 第三章 胎兒

#### 核の分裂

#### 第一 妊孕卵發育の狀態

喇叭管内にて妊孕した卵は、輸卵管の作用によつて子宮腔に下り、子宮内の粘膜に附着して漸次發育するものであるが、その發育の狀態は、最初卵子が變化して女性核を生じ、茲に精蟲の侵入を受けるので、精蟲は卵黄膜を通過して卵内に入り、尋て尾部を失ひて頭部のみとなり、そ

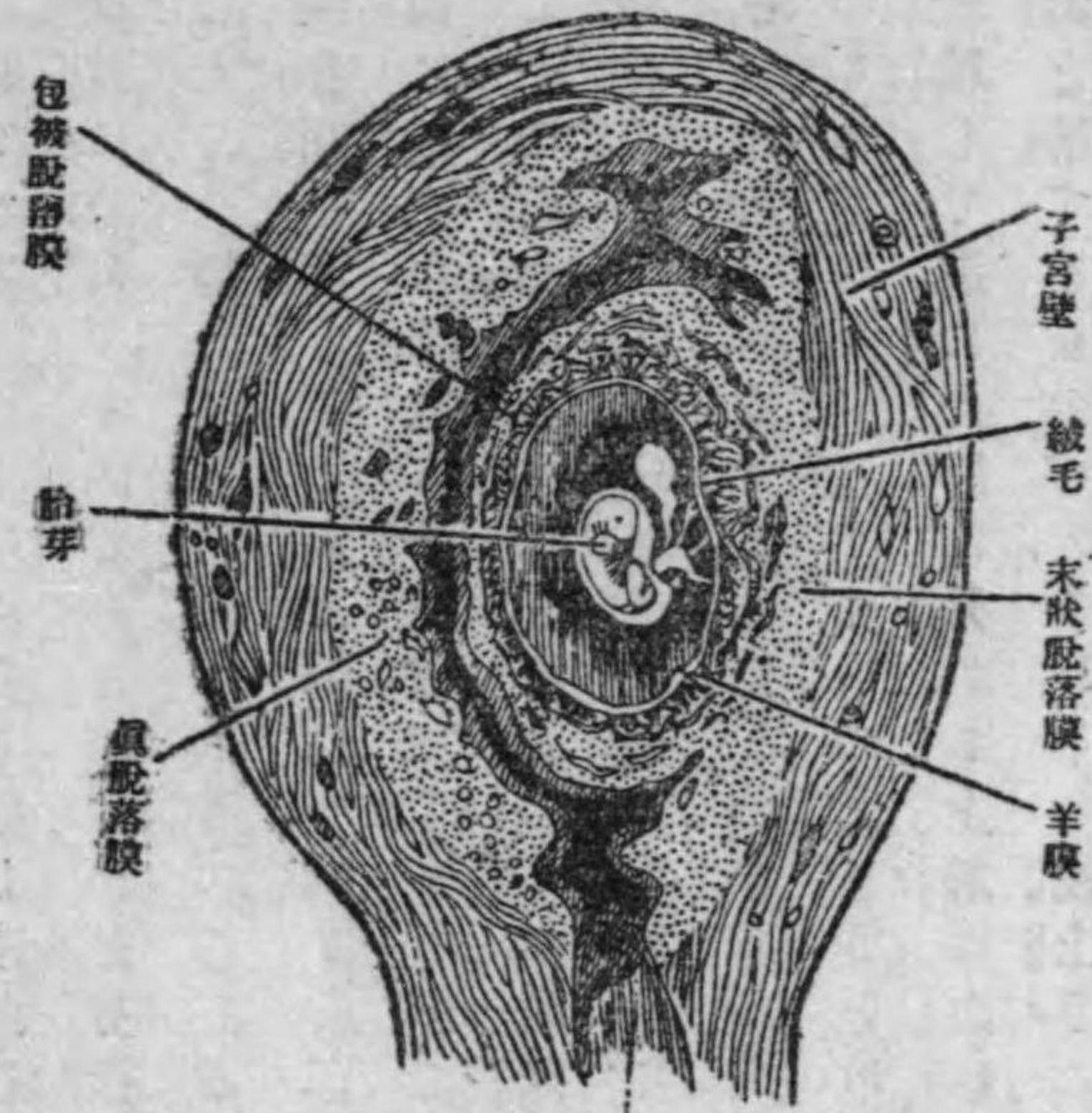
#### 三葉とな

の頭部は核のやうな性質を呈し來り、その周囲は卵細胞中の顆粒が放射線に並列するのであるが、之れを男性前核と名づけて、女性の前核と合して一個の核を新成するものである。此の男女合した核は漸次分裂作用を起して、その分裂は一個から二個、二個から四個、四個から十六個に逐次自乗數に分裂増加するものである。これと同時に分裂以外に、その周囲に存在せる許多の小顆粒球も亦内容の分裂を起すもので、分裂球に小顆粒球は漸次分裂増加して、卵膜の内面に正列して胚皮と云ふものを形成するに至るのである。此の分裂球は、最初は至極微細のものであるが、追々にその大きさを増し、胚皮の一部に重なり合ひ、堆積して遂に二層に分れる。上層は之れを上葉と名づけ、下層は之を下葉と稱するものであるが、その後上下二葉の間にまた一枚の膜を生じて、所謂中葉なるものを生ずる。此の三葉は胎兒の基礎を爲すもので



妊娠より分娩まで

妊娠卵の圖



ある、即ち漸次胎兒の發育するや上葉は腦脊髓神經表皮爪甲毛髮汗腺皮脂腺唾液腺を構成し、中葉は骨筋肉末梢神經血管結締織泌尿器生殖器等を形づくりに下葉は胃腸肺肝脾膀胱等を作爲構成するものである。分裂球が漸次發達して一定の固體を形體するやうになれば、卵膜と云ふものに被包せられ、胎盤を生じ臍帶によつて母體から營養を受けて、内に羊水

分裂球の發達

卵膜

を湛へその中に浮ぶものであるが、此等のものは皆胎兒の發育に缺くことの出来ない重要なもので、その一を失ふも直ちに發育を中絶するの止む無きに至るほど大切なものである。

卵膜は三層から出來て居る、外層は之を胎落膜と云ふて妊孕卵の子宮粘膜に沈着すると、その粘膜の各成分が増殖を始めて卵を圍み、遂に全く之を被包するものであるが、これが更に三部に區別されるのである、即ち卵の沈着せる部分を床狀胎落膜と名づけ、卵を被包する部分を胎轉胎落膜と稱へ、他の子宮内面を被へる粘膜を眞胎落膜と呼ぶものである。それからまた胎落膜と羊膜との間には脈絡膜(一名絨毛膜)と云ふものがあつて、これは卵自身から出來るものであるが、その形は丁度絨氈の毛のやうになつて、初めの間卵内に營養物を送つて居る。その次の羊膜は最も胎兒に接近して居るもので、胎生學上胎兒外皮の繼

第一編 妊娠の生理と其攝生



妊娠より分娩まで

二〇

續部から生ずるので、初めは胎児に密着して居るが、羊水が生ずると同時に之を離れて全卵の内面を被覆するものである。

胎盤はその状扁平卵圓形であつて青赤色を呈せる海綿様のものである。妊娠の末期には大凡三仙米突(一寸位の厚徑と、大約十六仙米突五寸三分の直徑と、約五百瓦百三十夕の重量を有して、一面は子宮内壁上に附着し、一面には臍帶が附着して、これによつて母體から營養分を攝取して胎児に輸るのであるから、胎盤は、普通人の消化器、呼吸器を兼ねる甚だ大切なものである。而してこれは分娩と共に子宮内壁から剝離脱落して、母體外に娩出せらるゝもので、俗に云ふ後産は、此の胎盤に臍帶、卵膜等が出るを稱するのである。

臍帶は、約五十仙米(一尺六寸三分)の長さをもつて、小指大の、左りに捻り捻れたる紐帶様のもので、その一端は胎盤の中央に附着し、他の一端

は胎児の臍に附着するものである。その構造は二條の臍動脈、一條の臍靜脈と、ワルトン氏膠樣質、二個の胚胎産生の遺殘物たる尿膜と、卵黃管とより成り立つて居る。臍帶は胎盤を通じて母體から送られ来る新しい血液を臍靜脈によつて胎児に送り、胎児の體内を循環して歸り来る靜脈血を臍動脈によつて胎盤を通じて母體に送り遣るところの貴重なる働きを持つて居るも、俗に臍の緒と稱するものはこれである。羊水は、一に亦胎水と稱するもので、羊膜腔内を充し、胎児を安全に保護するものである。最初はその量も少く、且つ清く澄んで居るが、胎児の發育に連れて漸次に其の量を増し、分娩期に近づく頃には半乃至一リートル(二合七勺乃至五合五勺)となり、且つ溷濁して帶白色となり、甘臭を放ち、亞爾加里性の反應を呈し、一〇〇六乃至一〇一二の比重を有す、その中に剝離したる表皮屑、胎脂、毳毛等を含み、化學的分析上には



妊娠より分娩まで  
 少量の蛋白(〇、一八六三%)鹽類、尿素、クレアチニン等を含んで居る。  
 妊娠中に於ける羊水の效用は、主として胎兒が自由に居るべき空間を設けて、その運動を自在ならしむるので、その他又衝動、打撲等總て外襲の壓迫を防ぎ、又胎兒の各部と子宮壁との癒着を起すことなく、胎兒の運動を直接母體に感ぜしめぬ様次に分娩時に當つては胎兒を形作つて子宮口を開き、羊水の流出によつて産道を滑澤にし、分娩を容易ならしむる等種々の效用がある。俗に湯又は水と稱するのは即ちこれである。

第二 胎兒の發育

受胎せる卵が子宮壁に附着すれば、その附着したる部分の粘膜は増殖し來つて、その卵を全く包んで了ふものであるが、その包まれたる卵は追々に變化して、その卵の一部分に胚板と稱する肥厚部が出來て來

る。それからまたその胚板が曲つて筒のやうになつて、胎兒の胴の基礎となり、その筒の一端は膨れて頭となり、他の端もまた膨れて臀部となり、次で頭部には眼、耳鼻、口などが出來、また胴の上部と下部とからは、左右二つ宛突出したものが出來るが、これは後に手と足とになるものである。そして一方受胎卵の附着せる子宮壁には胎盤が出來、その胎盤と胎兒とは臍帶を以て連絡して居る。臍帶には前述の如く三條の血管が包まれてあつて、これによつて胎兒は母體から營養物を攝るに至るものである。即ち我々は哺乳兒時代ばかりでなく、既に業に胎兒時代からして、母體より營養を取つて居るものであつて、母體の營養如何は、直接に胎兒の營養に影響するものであるから、従つて妊娠及び哺乳時代に於ける母體は、滋養物を攝つて以て營養を良くせねばならぬと云ふことも判るのである。



妊娠より分娩まで

二四

胎兒發育の順序



四十五日目



三十四日目



三十日目



二十一日目



十二日目

胎兒期の始め即ち卵の受胎せる當時にありては殆んどその形蛆に類して甚だ不得要領な格好をして居るものであるが追々に發育するに連れて漸次に人の形状が具つて来る。そしてその發育の順序は甚だ規則正しきもの故何時でもこれは妊娠幾ヶ月目の胎兒であると云ふことは大抵推知せらるゝのである。

妊娠第一ヶ月の末には、卵子の大きさは、鳩の卵ほどあつて、胎兒の長さは凡そ三分餘あり、その體は強く曲り圓い頭と尖つた尾端とがあり、眼は頭の兩側に黒い點となつて現はれて居るものである。

第二ヶ月

第二ヶ月の末には、卵子の大きさは、鶏の卵位になり、その中の胎兒の長さは、凡そ一寸三分に達し、眼は圓く凹んだ窩として現はれ、その他、鼻耳等も出來、手足も認めらるゝほどに出來て來るものである。

第三ヶ月

三ヶ月目の終り



二ヶ月目の終り

第三ヶ月の末には、卵の大きさは、鵝鳥の卵ほどになり、その中の胎兒の長さは、凡そ三寸位に達し、手足の指の區別もつくやうになるが、此の頃に至れ

胎兒の發育

第一編 妊娠の生理と其攝生



第四ヶ月

胎盤が出来るものである。  
第四ヶ月の末には胎児の身長は凡そ五寸三分弱になり、手足の指の先端には爪が出来、外陰部には男女の區別が判然となる。そしてまた胎児は少しく身體を動かすことが出来る、此の胎児の運動は即ち母體に胎動として感ずるものである。

第五ヶ月

第五ヶ月の末には身長は凡そ八寸二分餘になり、頭部には毛髮皮膚には毳毛が生えて、然も活潑に運動することが出来る。

第六ヶ月

第六ヶ月の末には身長は約一尺に達し、眼裂は出来かゝり、皮膚の下には脂肪層が出来、全身は帶黄色の胎脂で被はれて居る。

第七ヶ月

第七ヶ月の末には身長は一尺一寸五分餘、體量は二百六十匁餘に達し、その顔には皺襞が多く出来て、目を少しく開き、丁度老人のやうであるが、若し此の月に産れると低い聲で位き、少しは哺乳運動をする。そ

第八ヶ月

して此の月で生れた子は大抵は死ぬものであつて、若しまた偶に育つことがあつても、甚だ虚弱なものである。

第八ヶ月の末になると、胎児の身長は一尺三寸餘、體量は平均四百匁弱になり、皮膚は赤く、毳毛は多く、顔には皺がある、そして此の月に生れた兒は充分に注意して育てれば生活することが出来る。

第九ヶ月

第九ヶ月の末には身長一尺五寸弱、體量平均六百六十五匁に達し、皮下の脂肪が殖え、身體は一般に肥えて居る。そして此の月に生れた兒は、育つことは育つが、満月になつて生れた子供に比すると育ち悪い、兎に角早く産れた子供ほど育ち悪く、満月に近づくほどそれが育ち易くなるものである。

第十ヶ月

第十ヶ月の末には身長凡そ一尺六寸五分、體重平均八百目に達して、身體は十分に發育して豊圓なり、毳毛が少しなるが、醫學上には之を成



妊娠より分娩まで  
熟胎兒と稱するものである。  
胎兒各月の身長は、上に述ぶる通りであるが、これを各月に分り易く

柳式		月數
體	重	
$1^2 \times 2 =$	$2_{\pi}$	1
$2^2 \times 2 =$	16	2
$3^2 \times 2 =$	54	3
$4^2 \times 2 =$	128	4
$5^2 \times 2 =$	250	5
$6^2 \times 3 =$	648	6
$7^2 \times 3 =$	1029	7
$8^2 \times 3 =$	1536	8
$9^2 \times 3 =$	2187	9
$10^2 \times 3 =$	9000	10

基数とし之を三乗し(三乗とは四に四を乗て十六となる、それに今一度四を乗けて六十四となるを云ふ)更に二を乗ずる、即ち百二十八瓦(ハ×ハ×ハ×ハ)は、四月であるから四瓦を

計算する方法を述べよう。  
これは柳順次郎博士の發明にかゝるもの故、これを柳式體重計算法と名づく。  
此の計算法は例へば妊娠第四ヶ月に於ける胎兒の體重を知らんとするに

獨逸式		月數
身	長	
$1 \times 1 =$	1 <sub>仙米</sub>	1
$2 \times 2 =$	4	2
$3 \times 3 =$	9	3
$4 \times 4 =$	16	4
$5 \times 5 =$	25	5
$6 \times 5 =$	30	6
$7 \times 5 =$	35	7
$8 \times 5 =$	40	8
$9 \times 5 =$	45	9
$10 \times 5 =$	50	10

$4 \times 2 = 128$  之れに一瓦を日本量に換算して、二分六厘七毛弱を乗ずると(128 × 267 = 34,176)三十四匁餘となる。尤も六ヶ月目からは月數を三乗して更に之れに三を乗ずるのである。  
次に胎兒の各月に於ける身長(計算法を掲げよう、これは獨逸人の發明にかゝる獨逸式である)。

此の計算法は、假へば五箇月末に於ける胎兒の身長を求むるには、五箇月を五仙米突として五を乗ずると二十五仙米突と云ふ答が出来るが、これは即ち第五箇月末に於ける胎兒の身長である、そ

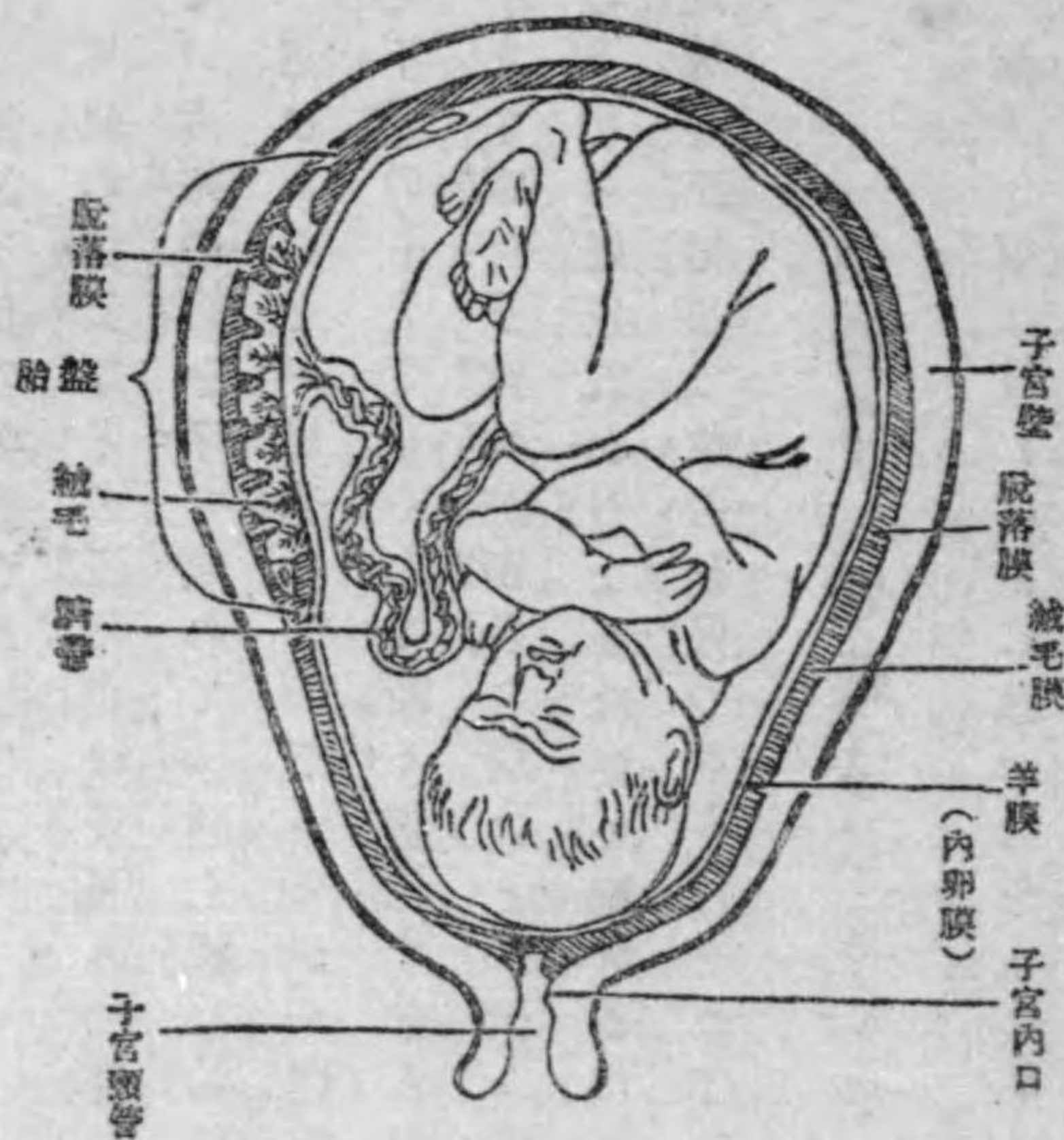


胎位 頭位 臀位 横位 斜位

妊娠より分娩まで  
 三〇  
 れに一仙米突を日本の尺度にして三分三厘強を乗ずると、日本尺で八寸三分弱となる。尤も五箇月まで其日數を自乗すればよいが、六箇月目からは月の數に五を乗ずるのである。然れば獨逸人に適するのであるから日本人はこれより少し身長が低い。  
 次に胎児が胎内に居るときには、どういふ格好をして居るか、即ち胎位はどうであるかと云ふに、子宮の縦軸と胎児自己の縦軸と一致して居る。そして此の位置に於て、胎児の頭部が下の方にあるのは頭位と云ふて、最も正しい自然の位置であるが、これに反して頭部が上方にあつて、臀部が下方にあるのは臀位と云ふて、即ち倒兒なのである。また中には、胎児が横又は斜になつて居ることもある、これは横位又は斜位と云ふて、不正當の位置であつて、甚だしく分娩を妨げるものであるから、醫師が産婆かに就て、胎児を矯正して貰はねばならぬ。

姿勢

胎児の子宮内に於ける位置



それから胎児の子宮内に於ける正しき姿勢は、その背部を屈め、頭部を胸につけ、腕を肘で屈めて胸に置き、脚もまた膝で屈めて腹につけ、踵を臀につけ、臍帯は腕と脚との間の凹みにあるものであるが、若し頭が仰向いて居つたり、臍帯が手足が頸にからまつたりして居るならば、そ



其診断

れは無論不正の姿勢である。  
 胎児の位置などの正不正は、産科専門醫または熟練せる産婆にありては、産婦の腹を手で觸れて診察し、或は胎児の心音を聴診器で聴診して定むることが出来るものであるが、一體此の胎児の位置や姿勢は一定不變のものでなくして、時々變化するもので、殊に胎児が割合に小さいとか、或は子宮腔が割合に廣いとか云ふ場合にはよく變ずるものであるから、妊娠五ヶ月よりは、時々醫師または産婆の診察を受けて、常に此等の正當なる位置を保つやうにせねばならぬ。

第四章 妊娠はどうして分る乎

婦人が妊娠すれば、前に述べたやうな身心に變化を來すものであるが、此等の症狀の中には、病氣などで起るものもあり、殊に初めての人に

不確徴

は、ほとんど見當のつかぬことがある。それで單に月經が止まつたとか、お腹がだん／＼膨れて來たと云ふだけでは、妊娠と決めるわけには行かぬから、左にその重なる鑑別法を擧げよう。  
 その第一は不確徴と云ふて、婦人の生殖器以外に現はるゝ徴候であつて、惡心嘔吐、身體倦怠、頭痛、眩暈、齒痛、下肢浮腫、呼吸促迫、尿意頻數、神經過敏等の諸症候を呈せるときには、或は妊娠ならんかと云ふ疑を置いて、も宜しいけれども、此等の症狀は他の病氣の場合にも起るものであるから、これだけでは、妊娠と確定するわけには行かぬ、即ち不確な徴候である。

疑徴

第二は疑徴 是は主として婦人の生殖器に起る徴候であつて、これまで毎月ちやんとあつた月經が止る、然も妊娠すべき理由があつて止る、それにお腹がだん／＼膨れて來る、乳嘴に色が着く、脛部の溫度が昇



確徴

つて、分泌液が増加するといふやうなことがあつたならば、先づ略々妊娠ならんとの疑を置いて、良いが、これとても他の子宮疾患の爲めにも起る徴候である故、これだけではまだ確かに妊娠と定むるわけには行かぬ。

第三は確徴。是は胎兒そのものから發する徴候である、即ち胎兒の心音を聞くとか、臍帶雜音を聞くとか、或は妊婦自身が胎動を感ずると云ふ様のことがあつたならば、最早一點も疑を容るべき餘地はない。尤もこれは妊娠の初期には分らぬものであつて、熟練なる産科専門醫、産婆等にあつては四五ヶ月目、又妊婦自身では胎動は六ヶ月位で判るものである。

早期診断

近頃アプテルハルゼン氏の早期診断法と云ふものがある、それは妊娠八日目に診断したと云ふが、此の法は専門家でなければ出來ぬもの

第一ヶ月

である。次に少しく妊娠各月の鑑別法を述べよう。これは何ヶ月目にはどうと云ふ一定の標準があるので、これによれば決して月數を間違ふことなどはない。妊娠第一月の終りには、腔の濕ひが増し、温かみも加はつて來るばかりでなく、熟練した人が診ると、子宮は平素よりも軟かになつて稍大きくなつて居ることが判る。それから妊婦自身にも亦腹部の温かみを感じ、胃部の苦悶嘔吐等起し、間々變つた食味、即ち青梅などのやうな酸きものを好むやうになつて來る。

第二ヶ月

第二ヶ月の終りには、子宮は鶯鳥の卵程になり、益々軟かになり、殊に子宮頸部即ち子宮の下部が軟かくなつて來る。

第三ヶ月

第三ヶ月の終りには、子宮は手拳程の大きさとなつて、大抵骨盤腔一



杯になり、その軟かさも益々加はつて丁度餅のやうになる。脛や皮膚に色が着き始めて下腹が少し膨れる、そして妊婦自身には便秘、尿意頻數、神経痛、乳房の緊張等を感じるに至るものである。

第四ヶ月

第四ヶ月の終りには子宮の大きさは、小兒の頭位の大きさとなつて、全く骨盤内に満ち、子宮の底部は骨盤の上に出て居る。そして此の月に至れば子宮雑音を聞き、また時としては胎動を覺ゆるものである。

第五ヶ月

第五ヶ月の終りには子宮底は臍と恥骨縫際との中央まで昇つて來る、そして此の月に至れば確實に胎動を感じ、下腹の膨脹、乳房の緊張等は益々著しくなつて來るものである。

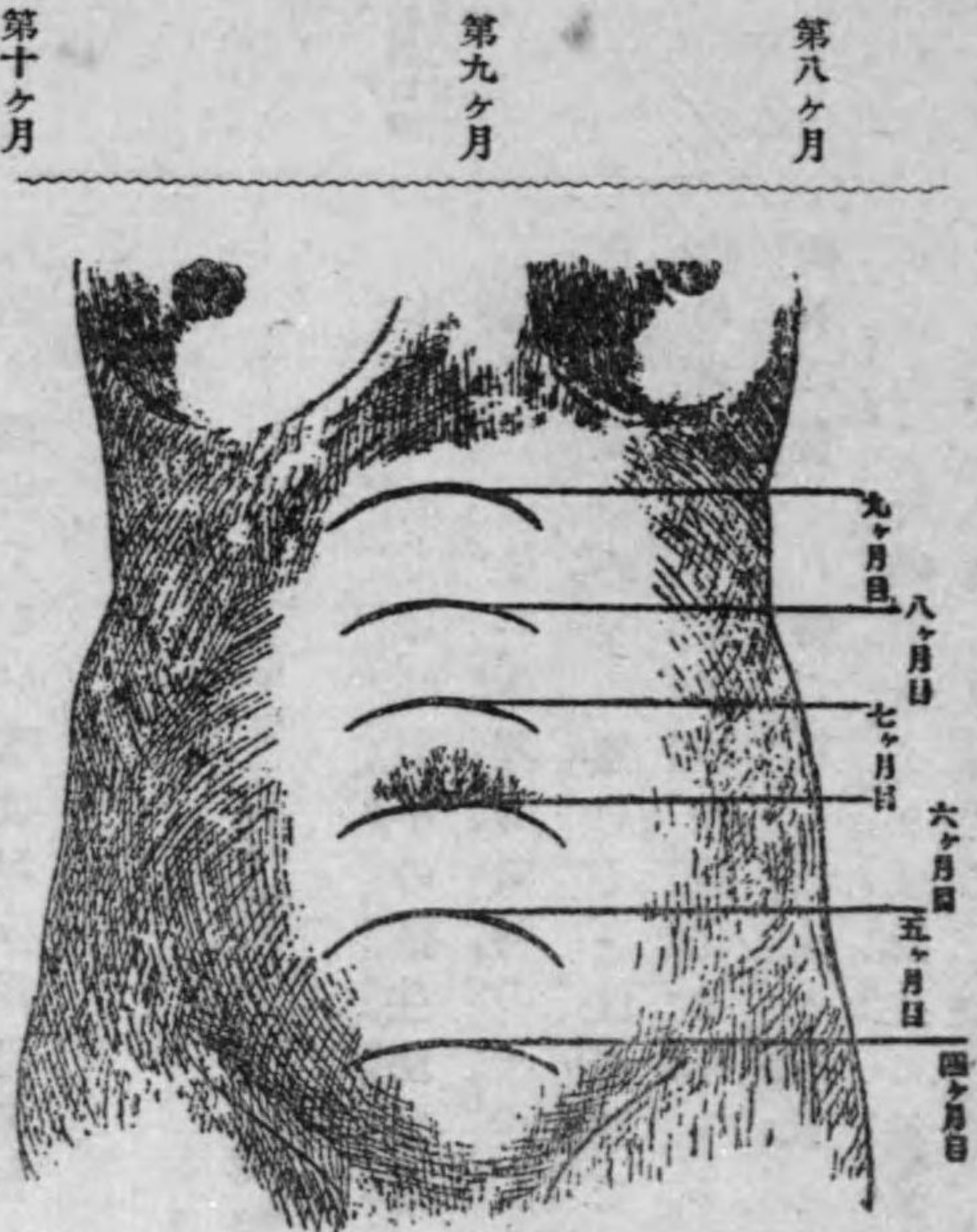
第六ヶ月

第六ヶ月の終りには子宮底は臍部迄達し、手にて明らかに胎兒の各部分を觸ることが出来る。

第七ヶ月

第七ヶ月の終りには、子宮底は臍部の上に二本の指を横へた位の高

妊娠月數と宮底の高さ



四月日  
五月日  
六月日  
七月日  
八月日  
九月日

第八ヶ月

第九ヶ月

第十ヶ月

さまで昇り、胎動は益々著明になり、臍の窩みは平らかになる。第八ヶ月の終りには子宮底が臍と心窩との中央の處まで昇り、そして妊婦は反り身になつて歩く様になる。

第九ヶ月の終りには、子宮底は心窩まで昇り、腹部は強く緊張し、呼吸困難、安眠不能、苦悶等はその極に達するものである。

第十ヶ月の終りには、腹は著しく前下方に膨れ出し、子宮底は反つて下つて、八ヶ月の末と同様にな



妊娠より分娩まで  
り、胎児の頭部は骨盤内に固定せられ、妊婦は呼吸も容易くなり、總ての  
苦悶は軽快するが、唯便秘と尿意頻數とは益々劇しくなつて來るもの  
である。

### 第五章 妊娠中の攝養法

本章に於ては、妊娠中の攝生法を述ぶるが、一體妊娠なるものは、決して病氣ではない、生理的機轉の一つであるから、従つて決して醫藥などを用ひるの必要の無いことは無論である。然しながら妊娠中には身體の諸機關は皆多少の變化を來すもので、生理的とは云ひながら、兎角病氣に襲はれ勝て早く云ふと病氣とは境界を接して居るものであるからして、矢張平素よりは攝生に注意しなければならぬ。尤も攝生と云ふても身分や職業、年齢その他によつて一と口に云ふことは出來ぬ

が、兎に角害の無い限りは平素の習慣を改めず、注意して、妊娠中を無事に過し、分娩を安易ならしむる方法を取るべきである。  
帯の締め方も、衣服の着方も普通でよろしい、一般に衣服は一體に緩かて、そして温たかなのが適するが、仕立方の窮屈なのを着たり、又は薄着するなどはよろしくない。肌着は木綿かまたはフランネルの類を用ひ、帯も成るべく緩かに締めるがよい。帯を堅く締めるのは禁物であつて、殊に胸部や腹部を緊迫するのは非常に悪い、これが爲めに呼吸と血行とを妨げ、胎兒と子宮の發育を發することになる、殊に妊娠の後半期に至つては尙ほ更のことである。

足部の冷えるのは、妊娠中には殊に障りになるから、ネルの長腰巻か、緩やかな股引またはサルマタを穿いて温保するがよい。また寒い時に椅子に長くかゝるなどは、矢張足部を冷却して害になるから注意せ



腹帯の利害

ねばならぬ。  
ねばならぬ。

妊娠より分娩まで

腹帯に就ては、その締め方によつては害になることがある。幅の狭いもので、緊く締めるなどは害になる方である。俗に腹帯を緩くして置くと、胎児は育ち過ぎて難産となるものであるから、ぜひ共緊く締めて置くべきものであると云ふて居るが、これは甚だ間違つたことで、却つて害を惹き起すものである。それから幅の廣いものを腹部一杯にゆつたりと捲くのは、腹部の冷えるを防ぎ、子宮と胎児の位置を正しく保つたの效能がある。また昔からの習慣で、腹帯は妊娠五ヶ月目の戌の日にお産が軽いと云ふ迷信から來たのであるが、強ひて戌の日に締めれば何の日でも宜しく、また五ヶ月目で無くとも七ヶ月位でも大丈夫である。それから腹帯の材料に就ても、いろ／＼の説があるが、最も宜しい

履物の注意

のは木綿か、フランネルの新しいのを一度洗濯して用ひ、そして時々洗濯して清潔なるを用ふることが大切の注意である。

履物は餘り高くない、また重くないものがよろしいが、さりとて草履の如く足の不潔になり易いものも宜しくない。然しキルクの草履は最も宜しく、軽い駒下駄なども元より結構である。また鼻緒はよく注意して途中で切れざる様丈夫なものを用ひなければならぬ。鼻緒が切れて若し転倒するやうのことがあると、それからして間々流産などを起すやうになるから注意せねばならぬ。

食物の注意

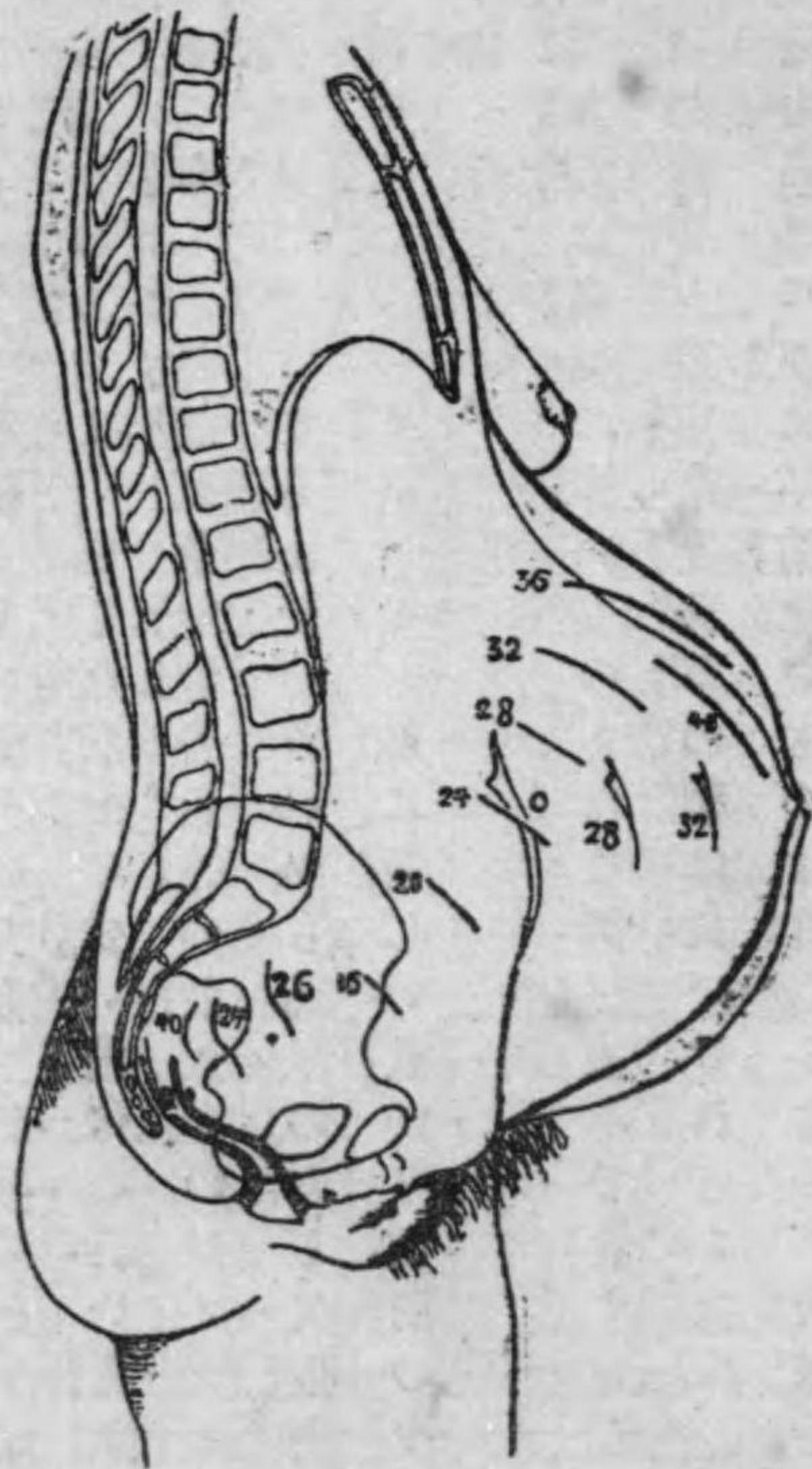
妊娠中の飲食物は如何なるものがよいかと云ふに、大體から云ふと、平素食べ馴れたもので成るべく滋養になつて、然も消化し易いものを選び、刺激性のものや、風氣を醸すものを避くると云ふに過ぎない。然しいくら滋養物だからと云つて、自分の好まぬものを強ひて食べる必



妊娠より分機まで  
 要はないから、平素食べ馴れたものを適宜に用ひれば良いのである。  
 けれども平素好物の物でも、若し妊娠してから嫌ひになつたものなどは用ひないに限る。殊に一度それを食べて嘔いたり、またはお腹が痛んだり、或は便秘するとか、下痢するとかいふ例のあるものなどは再び之を食べてはいけない。それからまた世の中には随分判つたやうな間違つた考へを持つて居る人があるもので、妊娠は自分一人許りで無く、お腹に胎児が居るから二人前食べなければならぬと云ふて、無暗に食べさせる人があるが、これは甚しき間違で、飽食は大に害になる。殊に妊娠の末期に飲食の度を過すと、分娩にまでも障ることがあるから程よく食べると云ふことは必要の注意である。

四二

妊婦に於ける子宮の位置



(数字は週を示す)

はよろしくない、従つて赤飯、餅、餛飩などは控へた方がよい。總て軟か目に炊き、よく噛んで食べるのが攝養法に適つて居る。パンは無論、差問はないが、蕎麥、素麵などの麵類はよろしくない。我が國人は、魚肉は、の好んで用ひるもので、至極



結構のものであるが、鰻、鮪、鰯、秋刀魚の如き脂肪の強い物は成るべく控へた方がよろしく、鳥賊、草魚、牡蠣、外の貝類や乾物の如きは不消化であるから用ひぬ方がよい、總て脂肪分の少い消化の良い魚類が適するものである、即ち鯛、鮓、鱈、刺魚、鱈、鯉、香魚等の如きものは、フライ以外ならばその調理法はいつでもよい。それから鳥獸の肉も矢張脂肪の強いものや、肉の硬いものは避けて、一般に新しい軟かな脂肪の少いものを選んで食べるとよい。

蔬菜類

蔬菜類では、繊維の少いもの、または葉を摘みて食するものは宜しい、例へば胡蘿蔔、玉菜、京菜、菠薐草の類は良いけれども、南瓜、筍のやうに瓦斯を作るもの又は不消化のものは宜しくない。大根、芋など少量なれば宜しく、芋類は不消化故食べぬ方が安心である。果物は、妊婦が總て好むものであるが、これでも未熟のもの又は傷あ

果物

りて腐れかけて居るものなどは宜しくない。杏、梨子、桃、葡萄、蜜柑、バナナ等は熟した新しいものなら食べても宜しいが、總て果物は多量に食すれば下痢を起したり、胃を損じたりするもの故注意しなければならぬ。

菓子

菓子類は非常に種類が多いが、兎に角餘りに糖分の強いものや、薄荷などの入つたものはいけない。精製ビスケットや、カル、ス煎餅、ウエ

香料

フアース、鳩麥煎餅、良き鹽煎餅のやうなものはよろしい。香料や辛味あるものは胃を刺戟して消化を悪くし、又腸に瓦斯を生じたりするものであるから、胡椒、生姜、辛子、唐辛子、葱、カレー粉などは成るべく用ひぬ方が宜しい。

飲料

妊婦の飲料としては、清水、薄い茶、番茶、麥湯、シトロン、サイダー等は宜しいが、濃い茶、珈琲、紅茶及び酒類は禁じなければならぬ。尤も平素用



妊娠より分娩まで

四六

ひ慣れた人ならば、日本酒の極良い處を少量に用ひる位は差支が無い。室内の清潔と新鮮なる空氣とは、人體の衛生上に缺くべからざる要件であるが殊に妊娠に向つては一層その必要を感ずるのであるから、居室、寢間とも常に清潔に掃除し、また新鮮の空氣の流通するやう換氣にも注意せねばならぬ。従つて多人数群集する劇場、寄席、教會堂の如き、空氣の不潔なる處は眩暈、頭痛を起し、又は卒倒することなどもあるから、成るべく斯様の場所には立寄りぬ方がよい、居室は北向きよりも南側がよろしく、日光を透射して明るく、然も乾燥した處が適するものである。

適宜の運動は妊婦の攝生に最も良いことであるが、よく人の云ふ懐妊中にジツとして居ると、お産が重くなるから、成るべく働いた方がよいなど事ふ俗説に迷ひ、過度の運動をする人もあるが、これは甚だしき

誤りである、殊に身體をゆさぶる運動、息む運動など、例へば長く俾に乗るとか、馬に乗るとか、或は自轉車に乗り、或は踊を踊るとか、長く洗濯するとか、中腰になつて蒲團の綿入を爲るとか、重い物を下るとか、高い處に手を擧ぐるとか、堅い引出を引くとか、高い梯子段を上り下りするとか、彈琴に耽るとか、ミシンを使ふとかは、皆害になる方の運動で、それが爲めに子宮の位置を轉じ、骨盤に充血を來し、遂には流産又は早産の不幸を見るに至ることになる殊に流産の癖ある人には此等の運動は嚴禁すべきものである。

過度の運動の悪いのは、前に述べ通りであるが、さりとて餘りに大事を取りて室内に籠居し、安逸を貪り、午睡に耽るなど、矢張害になる、それが爲めに精神沈鬱を來し、不眠、便秘、食慾不振等の障害を惹起することになるから、普通の家事を取るなどは元より差支なく、好天氣の時には、



妊娠より分娩まで  
戸外に出で閉静にして空気の新鮮なる所にて、二時間位適宜に逍遙するの非常に良いこと此等の運動によつて食機も進み、便通もよく、また精神も爽かになると云ふ利益がある、要は適宜の運動を取ると云ふことが大切である。

旅行の適否はよく聞かざる問題であるが、一般に云ふと初めの四ヶ月と終りの二ヶ月とは旅行と名のつく位のもはよろしくない。萬已むを得ざる時には五ヶ月目より八ヶ月目位の間に於てするがよろしく、これも一日に長途を通うては悪いもの故、平生ならば一日程の處を三四日位に分け成るべく早く旅宿に着して、ゆつくりと休むと云ふ風にせねばならぬ。

妊娠中は種々の病氣に罹り易いものであるから、殊に身體を清潔に保たなければならぬ、これに就て入浴は最も必要であつて、毎日入浴の

習慣ある人は無論毎日入浴するがよろしく、さもない人にあつては、一週に三回位は入浴した方がよい。それから入浴時間は餘り長くない方がよろしく、度外に熱い湯または度を過ぎて微温いお湯もいけない。また空腹の時、食後間も無い時、寒冒その他の病氣で熱のある時は皆入浴を忌む、そして浴後には暫く安静になし、暖かにして湯冷のせぬやう心がけねばならぬ。それから海水浴や冷水浴は禁物である。

妊娠中は陰部の分泌物が平常よりも増すものであるが、それを捨てて置くと、外陰部はそれが爲めに刺戟されて皮膚に痒味を覺え、遂には糜爛を起すやうになるものであるから、外陰部は時々微温湯で清潔に洗ふのは必要の注意であるが、此の際に腔内を洗ふことは禁物である。腔内を深く洗ふた爲めに、柔き粘膜を傷つけて出血したり、又は不潔なる水が中に入つたりして、反つて病氣の原因となることがあるから



乳房の保

妊娠より分娩まで 注意せねばならぬ。一番宜しいのは、體温位の温湯にて、毎日一回就寢前に腰湯することである。  
乳房は、將來その兒に哺乳せしむべき大切の場所であるが、その皮膚は軟弱なるが故に、嬰兒の哺乳の爲めに疵が出来て、其處より病原菌が入り、終には乳房炎などを起すことがあるから、妊娠中より注意して豫防せねばならぬ。殊に初産婦には、就中此の注意が必要である、また初乳と云ふて妊娠中に分泌する乳汁の爲めに滯ひ、終には糜爛を起し、或は裂瘡を生ずるにともある。かゝる場合には、早く醫療を受くべきは勿論であるが、此等の豫防として、妊娠八九ヶ月から、朝夕二度位清水或は微温湯にて洗ひ、ガーゼ或は脱脂綿にて能く拭ひ取り、乳嘴の凹んだところに附着してある不潔物を去り、また時には、アルコールを以て洗ふと、皮膚が堅くなり、疵が出来ぬやうになる。また人によりては、乳

便秘の手

下痢の手

嘴が餘りに引込み居つて哺乳に差支るものもある。此等は時々乳嘴を軽く指で摘んで牽き出すとよい、けれども無暗に刺戟しては悪いか、醫者か熟練せる産婆に施して貰ふがよろしい。  
婦人は兎角便秘の傾きあるが、殊に妊娠中には劇しいやうであるから、若し便秘の傾きあらば、適宜の運動を行ふと共に、毎朝冷水若しくは牛乳一碗を飲むか、或は野菜を多く食するか、養たる果實を食するかすれば、大抵は通ずるものであるが、若しそれでも尙ほ便秘するやうならば、微温湯或は泡の立つ位の石鹼水、またはリスリンにて灌腸するがよい、決して賣藥の下劑などを用ひてはいけない。灌腸の仕方は一度醫者か産婆かに習へば、誰でも出来るものである。  
妊娠中にまた便秘と反對に下痢勝の人もあり、或はまた食物の關係や、不攝生或は寒冒などの爲めに下痢することもあるが、何れにしても



妊娠より分娩まで

五二

下痢が長く續くと、妊婦が衰弱するばかりでなく、間々流産を起すことがあるから、若しも斯様のことがあつたならば、早く治療を加へなければならぬ。そして妊婦自身の養生法としては、腹部を温かくし、身體を静かにして、消化し易い、温かな食べ物をして居るとよろしい。

それから小水は、排尿の氣味があつたならば、決して永く我慢をせず、直ぐに排尿するがよろしい。そしてその間が餘りに近いとか、或は排尿時に痛むとか、何か異状があるならば、早く醫療を求むるがよろしい。

西洋人は、習慣で便器を嫌はないが、日本人殊に婦人は、平生便器を用ひつけないところからして、お産してから、便器に向ふと小水が出なくなつたり、大便の通じが無くなつたりするので、動いて悪いときに便所に行つてそれが爲めに餘病を惹き起したりすることがある。これ

は大抵の産婦が困るところであるから、妊娠の時から便器の使用に慣れて置くとよい。何事も前から慣らしたことでないと、急場の用に間に合はないので、所謂小事が大事になるから、よく氣を附けなくてはいい。

妊娠中の交會は成るべく避けた方がよろしい、尤も健康なる妊婦にあつては、房事必ずしも害を與へると思はれず、また妊娠後は自然に門に於ける性慾に遠ざかるのは普通である、けれどもまた中には妊娠によつて反つて此の方面の性慾の亢進する婦人もあるが、兎に角日々相應の勤勞に身體を鍛えて居る婦人や、または左無くとも、身體各部に異常の無い健康の婦人であつたならば、已むを得ざる場合に限りて、適宜の満足を取る位は大したる障りにはならない。尤も妊娠の始めと、臨月にはこれを禁止するの必要がある。分娩間近になつてからも、性



慾の節制が出来ないやうであつては、それが爲めに早産を來したり、或は産後に産褥熱など云ふ恐ろしい病氣に罹る機會を多くするもの故、力めて節制しなければならぬ。

それから妊婦に最も注意すべきは、精神の安静である。一體婦人は男子に比して精神感動の劇しいものであるが、これは妊娠中には一層烈しくなり、動もすればつまらぬ事に怒つたり、少しのことに悲しんだりするものであるから、周圍に居る人は出來得るだけ精神を慰め、假りにも心配になるやうなことは耳に入れず、常に精神を爽快ならしむる様仕向けるのは注意すべき條件の第一であるから、従つて込み入つた相談などは勿論なさず、家事の些々たる事など、耳に入らずに済むものなら、成るべく聞かせざる方がよろしい。良人は素より、家人も皆打揃ふて妊婦を慰め、情を平らかに、愉快にするやう話をなし、旅行、風景

樹木、花卉等に就て、興味ある話とか、または面白い音楽等を聞かせ、出來得る限り、精神を痛めぬ方針を取られた方がよろしいのであるが、これに反して、感動し易き小説を読み、悲しい音曲を聞くとか、その他精神に劇しい感動を興ふるやうな演劇、講談等は甚だよろしくない。それから實行は六づかしいことではあるが、舅姑または小姑等の折合のよから、からざる家庭などにありては成るべく別居せしむる方がよい。若しまた妊婦に過失でもあつて叱責するやうな場合に遭遇しても、決して大聲を發して怒鳴るやうなことをなさず、靜かに諭し聞かせる様にしなければならぬ。

睡眠は常に不足なきやうに心がけ、夜は成るべく早く寝ね、朝は成るべく早く起きて、新鮮の空氣を呼吸するやうになし、假令樂しき遊び面白き談話があつても、夜更しする等は、害になるから禁ぜねばならぬ。



無駄心配  
を  
する  
な

妊娠より分娩まで

五六

妊娠や分娩は元より生理的であつて、少しも恐るべきものでもなければ、また難しいものでもないが、初めてお産をする人は、どんなものか見當がつかぬので、無暗に心配苦勞を爲し、非常なる大難事と思ふ人もあるが、所謂案ずるより産むが易しと云ふ諺の如く、心配は無駄に終るものであるが、此の無駄心配は、身體に悪いばかりで無く、また胎兒にも障るものであるから、心を平らかにして、何事も安心して居るがよろしい。

妊娠中  
の  
薬  
用  
に  
就  
て

能く素人が物識り顔に、妊娠中は薬を飲むべきものでないと、自分丈用ひないのなら兎に角、わざ／＼見舞に行つて病人に説き聞かせ、甚しきは薬用を中止せしむる者もある。これは至極間違つた迷信で、危険千萬のことであるから、總て無責任な素人の云ふことを信じないで、醫師の責任ある處置に任かして安心して居るべきである。醫師が良

醫師の診  
療  
が  
必  
要

いと信じて飲ました薬には無論害あるべき筈はない。またこれと反對に腹を暖める薬とか何とか云ふて、妊婦に特に薬を勧めるものもあるが、これは止めた方がよい、妊娠は前に云ふ如く生理的のもので、決して病氣ではないから、従つて薬用の必要はない、何か故障があればこそ、始めて薬用の必要が生じ、此の場合には、醫師が投薬すべきもので、如何なる場合にも、素人が自ら薬を用ひてはならぬ。それから若し平素持薬を用ひて居る人であつたら、一應その可否を醫師に聞いてからにする方が安心である。

以上にて妊娠攝生法の大要を述べたのである、元より詳しいことは一人々々に就て説かねばならぬのである。小石川區原町一二五の健康相談所にては、特に妊婦産兒の健康増進法に就て御相談に應じて居る、これを一口に云ふと、何事も過不足無く、能くその中庸を得ると云



ふ一事に歸するのであるが、今一つ大切の注意が残つて居る、それはなにかと云ふと、妊娠中に醫者の診察を受けるの必要あると云ふことで、假令何等の異常が無くとも、妊娠の全経過中少くとも二回即ち妊娠の初期と終りとに診察を受けねばならぬ。初期の診察は全身並に局部の疾病の有無、骨盤の廣狹等を測定するの必要があるもので、若し分娩に至るまで異常あるを知らずに居れば、分娩に臨みて重き手術を母體に施すか、或はまた胎兒を殺さねばならぬことがある。尤も日本人には斯様にひどい骨盤狹窄は滅多にないが、それにしても軽い狹窄があつても、お産に難儀がある故早く診察を受けて、萬一の場合の豫防をして置くがよろしい。それから末期の診察は胎兒の位置の正不正を始め、その他種々の事柄を診る必要より生じたことである。胎兒の位置は、初期には始終變るものであるが、末期に至れば一定するものである。

胎教

から、若しその位置が悪いのならば、早く匡正して置かねばならぬ。その他何か病氣のある人、殊に心臓、肺臟、腎臟、肝臟等に病氣のある人、または下痢するとか、咳嗽するとか、水腫などの症狀ある人は、早く醫療を受けぬと手後れになることがある。

最後に胎教に就て述べよう。胎教とは、子供が未だ母のお腹に入つて居る間に教育すること、これに就て、小學と云ふ本に「昔周の文王と云ふ大賢人の母は、文王を孕んだときに、すべて悪い事は見も聞もしないで、よいことばかり見聞きし、又行つた所謂耳に淫聲を聞かず、目に悪色を見ずであるが、その中生れたのは、文王と云ふて周の天下の基を開いた立派な人であつたので、古聖人孔子之を稱して胎教を良くしたと云ふて賞めた話がある。」これはさもあるべきことで、妊娠中母の行状や思想は、悉く胎兒に感應するものであるから、喜怒哀樂その度を



妊婦より分娩まで  
過すことや、淫卑なる稗史小説を讀み、またいろ／＼の下らぬ話を聞き、不正の行爲をなすなどは、皆その兒を損ふ基であるから、成るべく精神を平和にして、善き事を見聞き、或は聖人君子、忠臣義士に關する講話を聞き、又己れが信ずる偉人傑士の肖像を壁上に掲げ、朝夕にその面影を忍ぶなどは、よろしいことである。かうして生れた兒は、將來矢張母の行狀の如く立派な人間になり得るのであるから、心ある人は、皆かくすべきは申す迄も無いことである。

第六章 分娩に至る迄の時日

卵が受精してから、胎兒が充分に發育して正規の分娩をなすに至るまでの日數、即ち妊娠の持續は、人によつて、長短種々であるが、今日までに知られたので、最も短いのは二百十日、最も長いのは三百十八日であ

る。支那の老子と云ふ學者は、八十年程お母さんのお腹に入つて居つて、産れた時には、頭髮は悉く白くなつて居つたと云ふことであるが、これは例の白髮三千丈流であるから、無論ほんとうにするわけには行かぬ。醫者の方では、妊娠持續日數を四十週、即ち二百八十日として居る。昔から佛家では、心經の文字は二百八十字あるから、人間もその文字の數だけの日數間、母の胎内に入つて居るから、人間は佛に歸依すべき先天的の因縁があると云ふて居るが、これは元より我田引水の説である。神博士が六百四十三人の産婦に就て、最終月經から、分娩に至るまでの經過を平均して二百八十二日半を得たとのことであるから、先づ昔から云ふて居る二百八十日位と見れば、間違がない。尤もこれよりも早いのもあれば、遅いのもあるのは前にも云ふた通りである。そして醫者の側から云ふと、豫定の日より十日や二十日早く生れても、ま



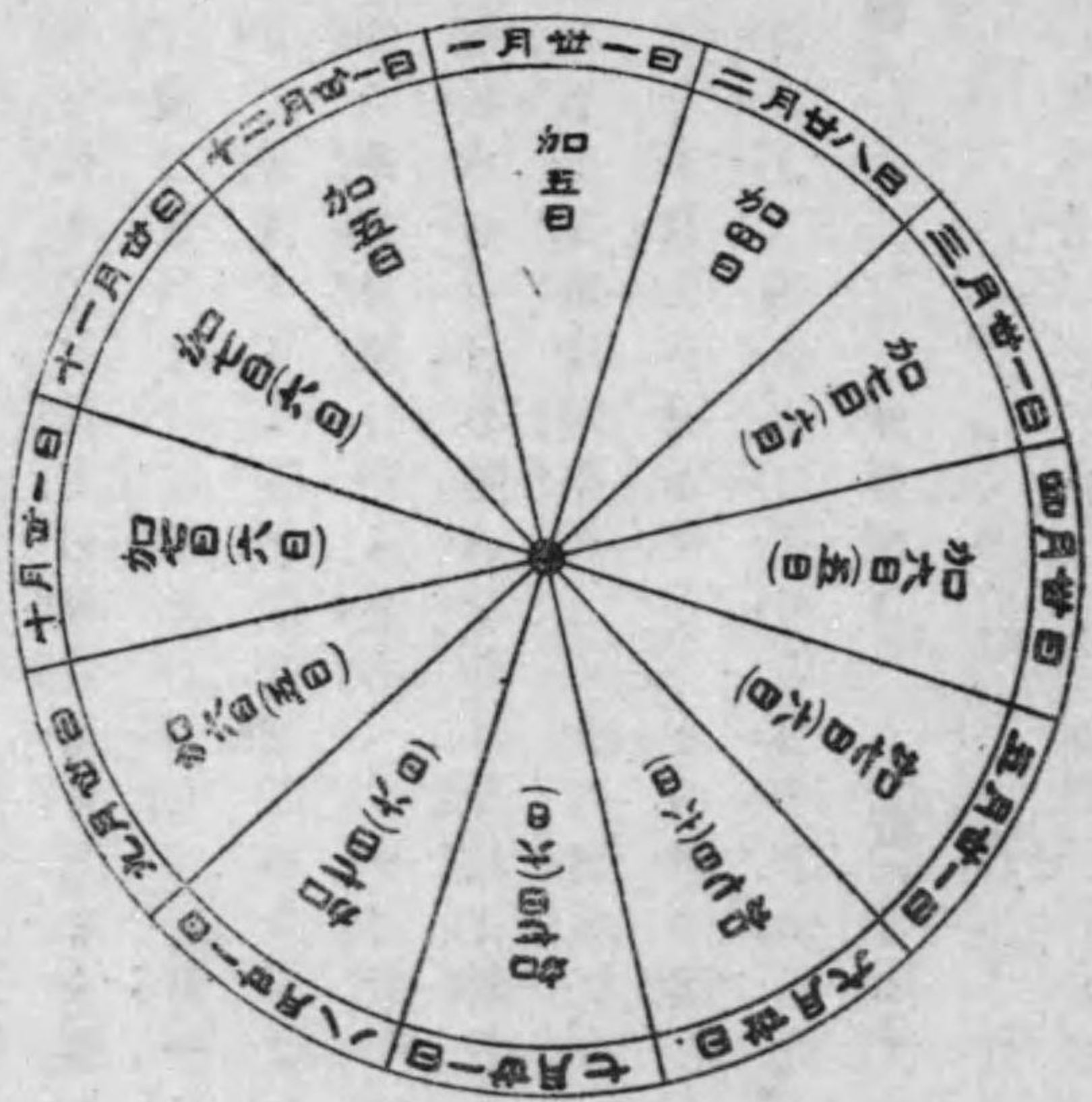
法の規定

妊娠暦

妊娠より分娩まで  
た少し位遅く生れたとしても、その生れた子供の發育が充分でさへあれ  
ば、生理的の日數を経過した成熟胎兒と見做すものである。  
六二

妊娠の持續日數は、また法律にも規定があつて、各國共にそれ／＼定  
まつたものである。我が日本に民法に婚姻成立の日より二百日の後  
または婚姻の解消若しくは取消の日より三百日以内に生れたものは、  
婚姻中に懐胎したるものと推定すと規定されて居る。  
分娩は、前述の如く平均妊娠二百八十日にして起るものである故、そ  
れを基礎として、大略の分娩日を豫知することが出来る。即ち最終月  
經のあつた月日より三ヶ月を引いて、或は九ヶ月を加へて、それに七日  
を加へた日が、大凡の分娩日である。此の方法によつて拵へた妊娠暦  
なるものがあるから、その雛形を示さう。  
此の暦の用ひ方は、例へば三月一日に妊娠したるもの即ち最終月經

妊娠暦





が三月一日なりしものありとせば、三月より三ヶ月左方の十二月一日に五日を加へたものは推定の分娩期日となる、即ち三月一日より十二月六日は丁度二百八十日に當るからして、三月一日に妊娠したものは、十二月六日に分娩することとなる理である。これから推して、凡て妊娠した日(即ち最終月経日)から左方へ三ヶ月數へ加と示してある日數(即ち四日、五日、六日、七日)を加へたのは分娩日數であることが判る(括弧内に記してある日數は閏年のもの念の爲めに、今一つ前の妊娠暦の展開したものをお目にかいませう。その理は同じく、最終の月経に九ヶ月と、その日により四日、五日、六日、七日等を加へたものである。

妊娠暦の展開

最終月経日	分娩期日	最終月経日	分娩期日
一月一日	十月八日	一月十日	十月十七日
五日	十二月	十五日	二十二日

最終月経日

分娩期日

最終月経日

分娩期日

一月二十日	十月二十七日	三月十五日	十二月二十日
二十五日	十一月一日	二十二日	二十五日
二月一日	四月	二十五日	三十日
五日	六日	二十八日	一月二日
十日	十三日	四月一日	六日
十五日	二十二日	五日	十日
二十日	二十七日	十日	十五日
二十五日	十二月一日	十五日	二十日
三月一日	六日	二十日	二十五日
五日	十日	二十三日	三十日
十日	十五日	二十八日	二月二日



妊娠より分娩まで

最終月経日

分娩期日

最終月経日

分娩期日

六六

五月一日	五月五日	六月二十日	三月二十七日
五月五日	五月九日	六月二十五日	四月一日
五月十日	五月十四日	六月二十八日	四月四日
五月十五日	五月十九日	七月一日	四月八日
五月二十日	五月二十四日	七月五日	四月十二日
五月二十五日	三月一日	七月十日	四月十六日
五月二十八日	三月四日	七月十五日	四月二十一日
六月一日	三月八日	七月二十日	四月二十六日
六月五日	三月十二日	七月二十五日	五月一日
六月十日	三月十七日	七月二十八日	五月四日
六月十五日	三月二十二日	八月一日	五月八日

最終月経日

分娩期日

最終月経日

分娩期日

八月五日	五月十二日	九月二十五日	七月二日
八月十日	五月十七日	十月一日	七月八日
八月十五日	五月二十二日	十月五日	七月十二日
八月二十日	五月二十七日	十月十日	七月十七日
八月二十五日	六月一日	十月十五日	七月二十二日
八月二十八日	六月四日	十月二十日	七月二十七日
九月一日	六月八日	十月二十五日	八月一日
九月五日	六月十二日	十月二十八日	八月四日
九月十日	六月十七日	十一月一日	八月八日
九月十五日	六月二十二日	十一月五日	八月十日
九月二十日	六月二十七日	十一月十日	八月十七日
九月二十五日	七月一日		

第一編 妊娠の生理と其攝生

六七



最終月経日	分娩期日	最終月経日	分娩期日
十一月十五日	八月二十二日	十二月十日	九月十六日
二十日	二十七日	十五日	二十一日
二十四日	九月一日	二十日	二十六日
二十八日	四日	二十五日	十月一日
十二月一日	七日	二十八日	四日
五日	十一日		

### 第七章 お産の用意

#### 第一 準備すべき品物

お産に用意すべき品には、母の方には必要なるものと、生児に必要なものとのある。生児に用意すべきものは、主として産衣と襦袢である。

産衣の拵へ方

産衣の仕立方は一定してあるから、その事は述べぬが、その地質だけは、成るべくしなやかな品がよろしく、下着はメリンスか綿ネルを用ひ、そして必ず白地にして欲しい、俗間には男なら麻の葉とか、女ならば赤とか、産衣の色は殆んど一定して居るが、色のあるものは、兎もすると着衣から嬰兒に色が移つて、その爲めに嬰兒の病氣に罹つたのを知らずに居り、甚だしきはそれが爲めに機會を失つて生命にかゝつた等云ふ例もあるから、色は必ず無地にしなければならぬ。尤も上衣だけは色物でも良いが、染色の剥げぬもので、そして有毒な染料の混らぬものを用ひ、仕立上つたならば、それを仕舞通しにせず、天氣の良い日には、時々乾して日光に當て、置くがよろしい。

襦袢は、十組もあれば大抵間に合ふものである、これも理想的に云へば、新しい白木綿を洗濯して糊を落したものが良いが、さもなりかぬる

改良襦袢の拵へ方



七〇 妊娠より分娩まで  
 人にあつては、單衣か何か地の柔かなものを解いて、一旦盥に入れ、その中に洗濯曹達一握りを入れ、上に熱湯を漉ぎ、そのお湯の冷めたところで、能く洗濯して乾かして用ひるのである。襟襟の拵へ方は、東京邊では、兩端を縫ひ合せて、輪のやうにしてあるが、これよりも布片を三角形に切り、その廣い基底部を臀部に敷き、兩角を前方で結び合せ、尖端は股間を過ぎて、結合部の下に挿置するやうにするのが最も重寶である。これなれば決して抜け落ちるやうなこともなく、それに汚染れたときに取代へるにも大層便利である。俗に云ふ改良襟襟と云ふのは、即ち此の拵へ方なのである。

お産に使ふ一式の道具を入れたもので、分娩具と云ふものがあるが、これだけでは未だ足りないやうである。それで今一切を家庭で調へると云ふ場合には、大凡左の通りあれば間に合ふものである。

- 一、油紙つきの蒲團大小三枚(大は二枚にて丈二尺五六寸の幅二尺二寸、三寸、綿三枚通り、小は丈一尺八九寸の幅一尺三四寸、綿二枚通り一枚)

これは大の方は、分娩の時に腰の下へ敷くもの、小は産後下りもの、爲めに蒲團の汚れを防ぐ爲めである。

- 一、油紙 大一枚 小一枚
  - 一、脱脂綿 三包
  - 一、晒木綿 二反(地の厚きもの一反、薄きもの一反)
  - 一、ガーゼ 二反
  - 一、青梅綿 四包
- 油紙の大きいのは、上敷の下に敷き、小さい方は便器を包む。脱脂綿は下り物を拭つたり、局部へ當てたりする。木綿の地の厚い方は腹帯



や手拭となし、薄い方は丁字帯とするのであるが、いよ／＼お産が近づいて来たならば、腹帯や丁字帯は拵へて置く、また青梅綿の方は、脱脂綿の下敷に使ふものである。

一 胞衣納器 土器製の八寸位のもの二個(一個は蓋となし糸で結んで置く)

一 鐵葉製便器 一個(但し挿込用のもの)

一 金盥 大小二個(瀬戸引ならば尙よし)

一 盥 一個(直径一尺五六寸のもの産兒入浴用)

一 良き石鹸 一ツ(産婆の手洗用または産兒入浴用)

一 湯タンポ 二個

先づこれだけあれば、大抵間に合ふのであるが、尙ほ用心の爲めに葡萄酒、食鹽、西洋蠟燭、數本を備へて置かれ、ば、何かの時に大層役に立つ

産具の仕末

ものである。それから成るべくは消毒薬として豫め百倍のリゾール水、三十倍の石炭酸水等の類を、醫者から貰つて備へて置く、と尙ほ結構である。それから子供の湯上げ用の大きな西洋手拭や、子供を寝かす蒲團、これは矢張白色で、長さ三尺、幅一尺五六寸、厚さ三寸位、搔卷は長さ三尺位、枕は幅三四寸、長さ七八寸、厚さ一寸位、枕の心には必ず木綿綿を入れる、よく使ふ蕎麥殻では刺戟するから、嬰兒用には適せぬ。

さて此等の用意が調つたならば、蒲團は天氣の良い日に、時々日光に當て、日光消毒をする、そして風呂敷に包めるものは包んで、總ての品を悉く一つの行李に入れて仕舞つて置くのである。これは當然主婦の當るべきことであるが、若し主婦自身が妊婦なる場合には、豫めその場所を召使ひに教へて其處に備へ置き、尙ほ自分で一應それを改めて置くが、良い、さうすると、やがてお産になつて産婆が来たとき、産具



妊娠より分娩まで  
七四  
のある場所さへ聞けば、それでもちやんと介抱が出来るので、大變好都合  
に行くものである。若しこれを一定の場所に纏めて置かないと、分娩  
に臨んで脱脂綿はあつたが丁字帯がない、或は何が足りない、彼に見  
えぬと騒ぎ廻つて居る間に、大事な時機を失つて危険に陥るやうなこ  
とが無いとも限らぬから、此の點によく注意が肝要である。それ  
から家によつては非常に氣が廻つたつもりで、脱脂綿の包み紙を取つ  
て、直ぐに使へるやうになど、して置く家もあるが、これでは反つて塵  
埃の爲めに不潔になるから、餘り氣の利き過ぐるものも賞めた話では  
ない。

昔の人は産襦袢と云ふて、お産には必ずボロを使ふべきものと心得、  
相當資産のある家でも平氣で使つて居るが、これは實に危険なこと  
である。その中にはいろ／＼不潔なものや、病毒の混つた處のあるもの  
もあるから、ボロは決して使つてはいけない、産褥熱など云ふ病氣は  
かういふ不潔物を使つた爲めに起ることもあるもの故、分娩には必ず  
消毒せるもので無ければ使はぬやうにしなければならぬ。また脱脂  
綿を薬綿と心得て、安心なものと心得て居る向きもあるが、これも唯脂  
肪を取つただけのものであるから、これを使ふには、一應消毒薬に浸し、  
搾つて後使ふやうにしなければならぬ。

第二 産室の準備方

田舎の農家に行くと、今でも納戸と稱して、日中でも人の顔が判然と  
見えぬ様な所に寢室を設けて、寢具は年中其處に敷き放すと云ふやう  
なところがあるから、かういふ處では無論産室も其處に設けられぬ。  
また左程でなくとも、お産と云ふと、わざ／＼土藏などの薄暗い處に設  
けるが、これはお産は穢れもの故、日光の當るところでは物體が無いと



理想的の  
産室

妊婦より分焼まで  
云ふ迷信からである。或はまた虚榮か虚飾か知らぬが、産室の周圍に  
箆筒長持の類を處狭しと並べてあるのが、これは何れも間違つ  
て居る。室が薄暗い程であれば、空氣の流通も無論悪いからして、従つ  
て産婦が逆上眩暈頭痛その他の病氣を醸し易いのは見易い道理であ  
る。それにまた薄暗く狭い處では、産婆の働きも充分でなく、舉動に敏  
活を缺き、萬事に不便であるばかりでなく、産後の消毒にも手落が出来  
勝て、従つて種々の障礙を惹き起すの虞がある。  
然らば、産室にはどんなところが宜しいかと云ふに、理想的に云へば、  
産室は消毒の出来る處がよろしいのであるから、事情が許すならば、産  
室の設けある醫師の處に入院するがよろしい。けれども自宅とする  
と云ふときには、日當りの良き東か南に向いた六疊か八疊の閑潔な室  
がよろしく、そして成るべく水の手の便利のよい、然も次の間のある處

産床の  
拵

が良い、尤も何處の家でも此の注文通りの室があるとは限つて居らぬ  
から、要は日當りと清潔とを主眼として選ぶが良い。そしてその室の  
器具雜品は出来るだけ他室に運び、天井から室の隅々まで綺麗に掃  
除して、何時でも産床を設けることの出来るやうにして置くのである。  
そして、いよゝお産の催しがあつたならば、少し早目に過ぎる位に、使  
を産婆の方に遣はし、一面には産床の準備にかゝるがよい。  
産床即ちお産する床は、成るべくならば、寢臺に設ける方がよろしい  
が、普通の日本風でも、差支がない前の通りに綺麗に掃除した室に清潔  
な蒲團を敷き、その上に油紙かゴム引きの紙を敷き、またその上に清潔  
な敷布を敷いて、前に用意せる小蒲團を敷き、産婦の臂の當る處には、脱  
脂綿を入れた新しい白木綿の小さい褥を敷いて、お産の時に排出され  
た羊水や血液の浸み込むやうになし、妊婦は兩便を排泄して、その上に



仰向けに寝ね、その上には軽い蒲團や毛布をかけ、一方には湯を澤山に沸かして、必要な道具を備へ置き、何時生れても差支が無いやうにして置く、産婆も誠に心持よく仕事が出来るものである。

### 第八章 良産婆の頼み方

産婆の  
切選

産婆は親子二人の大事な生命を預かる大切な役目を持つてゐるものであるから、その頼み方に特別な注意を拂はなければならぬ。今その頼み方はどうすればよいかと云ふに、これには四通りの注意がある、第一は産婆の経歴を調べる、即ち何處の學校、何處の先生の所で修養し、開業してから何年になるか、それから判るならば、妊婦診察の模様、お産に臨んでの處置、消毒の方法、嬰兒に對する工合、産褥に對する處置等を聞いて、それに對する醫者の意見を求め、またその人の扱つた産婦に怪

良産婆の  
頼み方

最も  
確實  
なる法

我が無かつたか、死兒は多くなかつたか、産褥熱はどうかと云ふことを能く調べて、これならば安心と云ふ處で頼む。第二には、お産の多くは夜間であり、それに經過の早い人にあつては、遠いところならば迎ひの戻らぬ間に済んで了ふことがあるから、同じ程度の産婆ならば、遠い方より近い處の方がよろしい。第三には、産婆は家庭の奥まで出入し、それに一家の秘密を知り得る境遇にあるから、その品性の下劣な人間を頼むといろゝ下らぬ迷惑を感じることがある故人格の立派なものを頼まねばならぬ。終りに最も確實な方法は、産科醫より然るべく産婆を推薦して貰ふことである。これは醫者の方にも責任があるから、必ず安心の出来る人間を選んで呉れるし、産婆の方でも推薦者に對する責任上、どこまでも立派に責任を果すと云ふことになるのであるから、始めて家庭を



産婆を招  
ぶ時

妊娠より分娩まで

八〇

持つた方の産褥には是非かうした頼み方が安心である。  
以上の如くにして良き産婆を頼み置き、さていよいよお産と云ふと  
きには必ず名刺を持たしてやるがよい、また若し電話で招く時には必  
ず何區何丁目何番地の何の某と、明らかに姓名を告げて招ばねばな  
らぬ。と云ふのは産婆には同じ苗字の産家が二軒あることもあり、唯  
伊藤とか云つた丈では間違つて外の伊藤に行かぬとも限らぬ、否こ  
れは想像談でなく、實際あつた話であるから、東京の如き繁華な土地に  
住する人にあつては、必ずかうした注意が必要である。

### 第九章 お産の近いた徴候と其心得

お産の近  
いた徴候

妊娠が都合よく進み、いよいよお産が近いて来ると、大抵の人はお産  
の二十日位前から、何となくお腹が張つて来て、小水も今までよりは近

家族の心  
得

くなる。それからだん／＼近くに從つて、お腹が時々痛んで来る、そし  
てそれが一時間か三十分かと云ふ風に時を隔て、痛む様であつたな  
らば、いよいよお産が近いたのと思ふて、先づ兩便を排出し、出來得るな  
らば湯に入つて身體を清め、シャツや下着等總て身體を緊縛するもの  
は悉く取り除け、緩やかに着物を着け、頭の裝飾は皆取り去り、頭髪は  
ぐる／＼巻きにして安らかに産床に入るがよい。産室には無用の人  
を出し、せしめぬやうになし、また成るべくは、お産間近には物馴れた看  
護婦を雇ひ入れて置くがよい。それからまたお産間近になつて、前述  
べた通りに腹が痛んで来ないでも、少々位血液が混つたと思ふ位に色  
附いた下り物がある人もあるが、これも矢張お産の近くなつた徴候で  
あるから、矢張速に産婆を招くがよい。  
お産は目出度もので決して心配が入らぬものであるが、初めてお産

第一編 妊娠の生理と其攝生

八一



妊娠より分娩まで  
八二  
する人にあつては、その度合が判らぬから成るべくお母さんなり、お産の経験のある人が傍に居つて力をつけて上るがよろしい。けれども側に居る人がいろく口を出して醫者や産婆を困してはいけません。またお産の時には良人なり親御さんなり、その産婦に對して全責任を持たるゝ人が必ず在宅しなければなりません、かう云ふ方が在宅されると、何かの時に大變都合よく出来るから、これは必ずさうして欲しいものである。  
今時の教育を受けた人に所謂新しい女の連中には、お産の時に騒ぎ廻つて醫者や産婆を困らせる人があるが、いくら騒いでも別にお産が軽くなるわけではない、反つてそれが爲めに重くならぬとも限らぬから、産婆の來た以上は安心して身體を産婆に任せ、精神を安静にして居るがよろしい。それからまた産婆から醫者を招いて欲しいと申し出た

ときには、イヤ今少し様子を見ようとか何とか自分勝手にせず、早く招ばなければならぬ。産婆は決して不用な醫者を招ふのではなく、必要あればこそ招くのであるから、此等は素人考へて彼は云はずに、總て産婆に任せる方が安心である。またところによつてはいろく迷信があるが、これも皆廢めなければならぬ。

### 第二編 分娩の生理と其攝生

#### 第一章 お産のいろく

分娩とは、胎兒并にその附屬物なる胎盤、臍帶、卵膜、羊水等が自然の力で母の體內から産出されるを云ふのであるが、此の際分娩に與るものは、子宮の收縮する力、即ち陣痛、腔の收縮する力、并に腹壓の三つの力の總合であつて、胎兒が生れ出づるには必ず一定の道、即ち産道を通らな



ければならぬが、此等の説明は餘り専門的に互るから略して、分娩の區別のみを述べるが、これには大體二つある。

正規分娩 第一は正規分娩と云ふて、即ち尋常の分娩である。これは母體にも胎兒にも少しの變狀が無く、然も特別に他人の力を借らずに、自然に娩出し得るものを云ふのである。

異常分娩 これは母體か胎兒かの何れかに何か異常がある例へば骨盤が狭いとか、或は胎兒の位置が悪いとか云ふ様のものであつて、そのまゝにして置けば危険を招く虞があり、どうしても他人の力即ち醫師か産婆かの手を借らなければ分娩することの出来ないもので、これを人工分娩、また俗には難産と稱するものである。

分娩はまたその生れる時期、即ち妊娠してより生れるまでの日數の長短によつて、これを左の四種類に區別するものである。

定期産 妊娠第三十九週より、四十週間の間に生れるもので、これは最も正しい處のお産である。

遅産 第二は遅産と云うて、妊娠第四十週即ち二百八十日以上経つてから生れるもので、普通よりは遅い方であるが、記録に據れば、今日迄最も遅いお産は三百十三日である。尤も此の遅産の方は、母子共に異常なく健全なる場合には、少しも害が無く、小兒の爲には反つてよろしい位である。

早産 は、妊娠第二十八週から第三十八週までの間に生れるものであつて、普通のお産より日數は早く生れるが、相當の注意を拂へば兎に角生れた兒は育つて行くものである。俗に八月兒とか、九月兒とか云ふのは即ちこれである。また俗には七月兒は育つが、八月兒は育たないなど云ふが、これは元より誤りであつて、七月兒よりも八月兒、八月兒



妊婦より分娩まで  
 よりも九月兒九月兒よりも満月の兒と云ふ風に長く母の胎内に居つて遅く生れたものほど育て易いものである。  
 流産 第四は流産である、即ち妊娠第二十八週以前に生れるものであつて生れた兒は逆も育つことは出来ぬものである。  
 分娩の區別は右に述ぶ通り數種あるが、お産の輕い重いは何處で分けるかと云ふに、素人は早く生れるのを輕いお産と心得従つて昔風に坐産を喜ぶところもあるが、坐産によつて急激に分娩すると得て局部に創傷を起し易いものであり、従つて種々の障害を起すものであるが、これに反して臥産によつて徐々とお産をする方は、怪我が無くて済む場合が多い。要するにお産の輕重は、時間の長短によるものではない、時間がいくら早くとも産婦に障害を來せば即ち重いお産であつて、時間が少し位長くかゝつても、母子双方に何等の障害を來さぬものは、

これを輕いお産と云ふて祝福すべきものである。  
 お産は潮の干満に關係があるとは昔から人の云ふことで、満潮の時に限りて分娩することである。山田醫學士の説によれば、干潮の時よりは、満潮の時には、多少分娩が多いと云ふことであるが、未だ充分の研究がないから、確かなことは云へぬ。

### 第一章 正しきお産の經過

分娩の經過は醫學上ではこれを三期に區別してある、即ち第一期は、開口期と云うて、分娩の初期から子宮口が全く開いて、胎兒の通過が出来る状態になつた時までのことを云ひ、また第二期は、娩出期であつて、子宮口が全く開いた時から、胎兒が産道を通過して母體外に出づるまでの時期を云ひ、第三期は、後産期と唱へて、胎兒の出たときから、胎盤卵

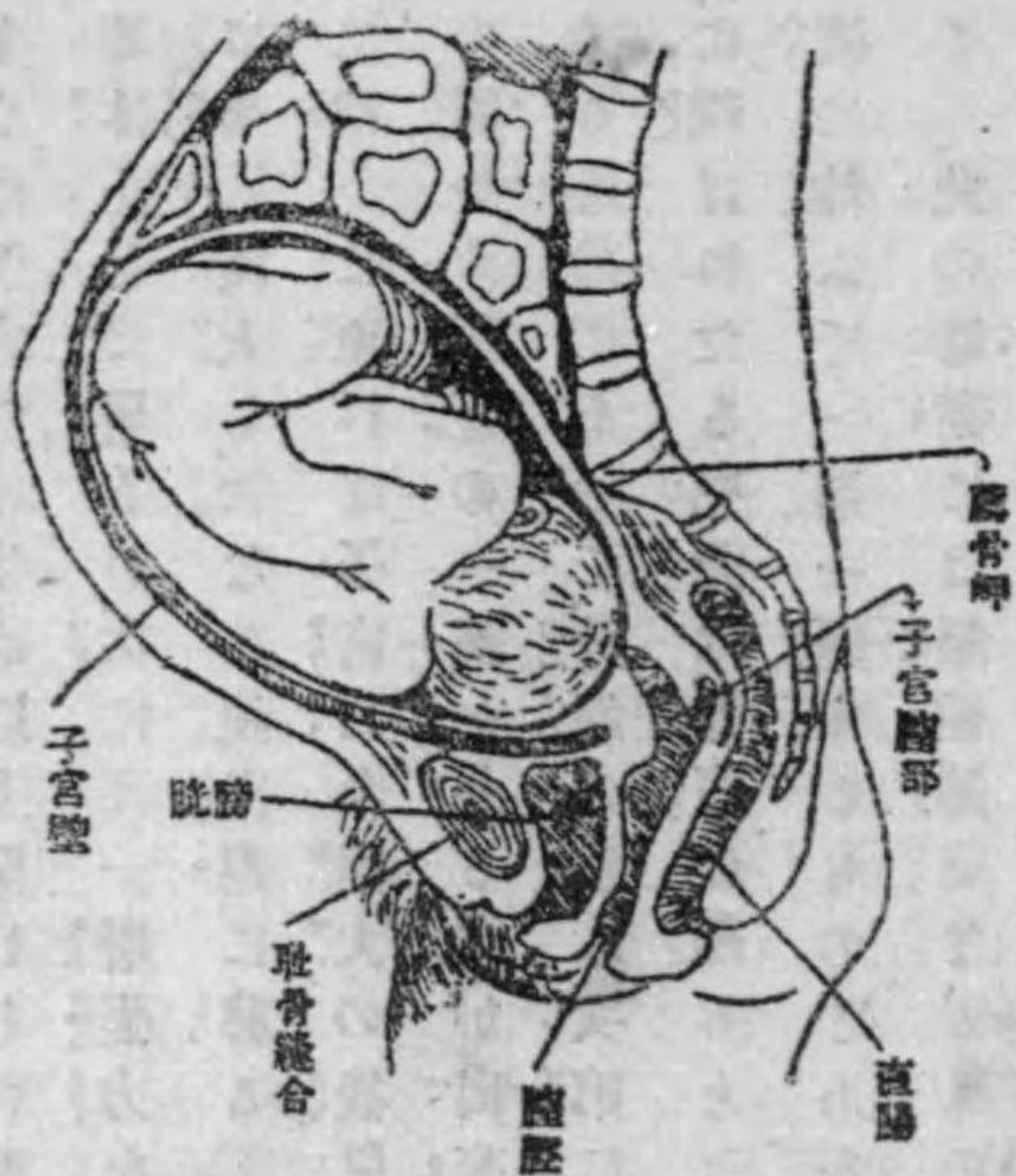


妊娠より分娩まで  
 膜臍帶等胎兒に附屬せるものが悉く排出し終る時までのことを云ふので、これで全く分娩が終つたのである。今此等に就て少しく説明しよう。

分娩の起る前には必ずその前徴がある。即ち妊娠の末期になると時々子宮が収縮して腹部が突張る様に硬くなり、時には疼痛も可なり強いこともある。前驅陣痛と稱するものがこれであつて、大抵は數時間後には消失するものである。かゝる状態が繰り返して起る時は、數日後には眞の陣痛に移るものであるが、此の以前よりして、妊婦は身體の運動が困難となつて、大小便の通じが近くなる。そして陣痛が劇しくなると、次なる開口期に移るものである。

第一期 即ち分娩の初期に至れば、陣痛は頻發強烈となつて、子宮内口は著しく開大し、卵膜は子宮下部に於ける附着點から剝離せられ、

分娩直前に於ける胎子の子宮



又陣痛の壓迫によつて、兒頭に接着した卵膜部に向つて、羊水の一部を驅逐するものであるが、此の羊水は胎胞を形成して、次第に子宮頸管内に突入し、次で外子宮口内に楔のやうに突入して、此の部を上方から開口せしむるものであつて、胎胞中にある羊水は、これを前水と稱するものである。その間にまた陣痛は益々強烈となり、遂には胎胞は破裂して、少量の羊水を出す

が、俗に湯が下りたと云ふのが、このことであつて、醫學上では、これを第一



妊娠より分娩まで

九〇

胎水の流出又は前水の流出と云ひ略して破水と稱して居る。此の破裂は多くは子宮口の半ば以上開口した時に起るもので、破裂後は陣痛は暫時休止して居るが、次には一層強力を以て頻りに發し來り、遂には子宮口全く開大し、次なる娩出期に移るものである。

第二期に至れば子宮口の開大の後、兒頭は腔内に進入し、遂には兩陰唇の間から頭蓋の一部を見る事が出来る。此の時から腹壓の作用を要するものであつて、分娩の進み次第に、その強さを増すものである。腔内に現はれたる兒頭は、陣痛の起るときには進み、間歇時には退く、即ち陣痛に伴ふて一進一退するものであるが、遂には間歇時にも退かなくなると、此の時期には壓縮陣痛なるものが起つて來て、産婦は劇しき疼痛を感じて呻吟するものである。

此の時期には、胎兒の頭は、非常の壓力を受けるので、その壓力を受け

ないところ、即ち一番先に進んで、子宮口に當れる部分に鬱血する爲めに、一種の軟かい腫瘤が出来る、これは産瘤と云ふものである。それから胎兒の頭は出来るだけ、その容積を小さくし、また骨盤腔の形狀に適合しようとするので、頭蓋の諸骨は互に相重なり合ふものである。それから段々進んで來ると、母體の會陰は非常に伸びて、豊隆し來り、肛門は開いて、便意を催して來るから、産床に入るときに排便しない人は、此の際に脱糞することがある。また膀胱に尿が溜つて居ると、これも此の際に洩らして了ふものである。それから腔口は徐々に開いて來て、遂に兒頭が娩出されるのであるが、此の際には疼痛の極點に達する故に、氣の弱い産婦は戦慄したり、或はまた苛く叫ぶこともある。兒頭が娩出されると、間もなく次の陣痛が起つて、胎兒の軀幹が娩出され、これと同時に後に残つて居るところの羊水も漏出するが、これは後水或は第



二水と名づくるものである。胎児が生れると、産婦は著しく軽快を覚え、重荷をおろしたやうな感じがするものである。また生れた子供は、直ちに強い大聲を擧げて號叫する、所謂産聲を擧ぐるものである。

第三期 今や産婦は、困難苦痛の業務を終へて安心して居る。其より輕き陣痛が時々起つて、十五分乃至一時間位の後に、臍帯の着いた大きな胎盤を生み出すのであるが、此の際産婆は外陰部を充分清拭して、綿密にその状況を視察して損傷無きや否やを調べ、また胎盤に缺損無きや否やを検し、愈々異状無きを確かめたところで、産婦の外陰部に消毒綿を當て、丁字帯をなさしめて、新しく小蒲團を敷き代へて安臥せしむるのである。茲に一言注意したいのは、事慣れぬ産婆は、少し後産が後れると、氣を焦ち、手を腔内に挿入して胎盤を摘み出さんとしたり、或

は臍帯を引いて胎盤を出さんとするやうな無法のことをするものもあるが、これは以ての外のこと、これが爲めに子宮出血を起したり、或は不潔物が侵入して、爲めに恐るべき産褥熱の原因となることがあるから、よく注意すべきことである。一體出血さへ無ければ、急いで後産を出す必要がないもので、先づ二時間位は、経過を監視して居つてよろしい。

お産は大抵夜間のものゝやうであるが、これに就て木下博士の調査せられたるものを見ると、分娩の始まる時間の最も多いものは、夜十二時より三時の間にあつて、最も少いのは、晝九時より十二時の間である。また分娩の終る時間の最も多いものは、夜十二時より三時の間であつて、最も少いのは、晝十二時より三時の間である。即ちお産はどうしても夜間に多いものであるから、お産間近になつたならば、夜中



妊娠より分娩まで

九四

でも直ぐに間に合ふやうに總ての準備を調へ置くべきものである。それからお産が初まつてから終るまで、通常何時間かゝるか云ふ

産婦 産兒	初産婦		経産婦	
	西洋人	日本人	西洋人	日本人
第一期	15.5 時間	11.0 時間	6.5 時間	5.0 時間
第二期	1.5 時間	2.8 時間	1.5 時間	1.5 時間
第三期	15 分	30 分	18 分	28 <sup>3</sup> / <sub>4</sub> 分
合計	17.15 時分	14.20 時分	8.18 時分	6.58 <sup>3</sup> / <sub>4</sub> 時分

此の分娩の持続時間に就て木下博士が明治三十四年に報告せられたのは上表である。

初産婦は経産婦よりも長くかかる、殊に三十歳以上になつてから初めてお産をすると云ふやうな人は最も長くかかる。

此の表によつて見ると、初産婦の分娩時間は日本人よりも西洋人の方が二時間五十五分、また経産婦の方では、一時間と四分の一ほど長くかゝつて居るわけ、何れも西洋人よりも日本人のお産は短い時間に済むのである。

### 第三章 分娩時の攝生法

通常のお産にあつては、他人の補助を要しないもので、それは野蠻人は簡單なものである。インディアン人の如きは、旅行中にも産意を催すと、途中の木蔭にて分娩し、自らその後仕末をなして、産兒を懐に入れたまゝ、旅行を續くるさうであるが、これは世界中最もお産の軽い人種と稱されて居る。

野蠻人に反して、文明人程お産は重く、殊に西洋人は、お産は一般に日



本人よりも重い。また日本婦人は非常に忍耐の強いが、此の忍耐も或る程度まであつて、若し異常のあつた場合には、單に忍耐の力のみにてはどうすることも出来ぬ。異常にはいろいろあつて、分娩の異常もあれば、また母體の生殖器に異常のあることもあり、或はまた胎兒に異常のあることもあり、また分娩中咄嗟の間に危険を招くこともあつて、醫師を招く時間が無いこともあるから、殊に初産婦にあつては、分娩時には成るべく専門醫の立合を求むる方が安心である。

分娩の時には、生殖器に多少共新しい創傷を受くるのであるから、お産に使用するものはすべて消毒が大切である。決して古綿やボロを使つてはならぬ。今日に於ては、人智が大に發達し來つて、衛生上のことは毎日の新聞、またはあらゆる雑誌に掲載されて居る位であるから、餘程衛生上の知識は進んだ様に思はれるが、分娩のことに就ては甚だ冷

淡な傾きがあつて、相當の知識があり、資産ある人のところでも、お産の時には必ずボロを使ふものと心得て居るのか、間々さういふものを見受けるが、お産は創傷を出かすと云ふことを考へたならば、普通の怪我同様消毒の大切なるは判ることと思ふ。

序に此處に一寸斷つて置かねばならぬのは、新しいものと消毒したものとは、その意味が全く異つて居ると云ふことである。いくら新しくとも消毒せぬものは、お産に用ひてはならぬ。新しく消毒したものであれば、申分が無いが、新しく消毒しないものは、古くて消毒したものに比べて劣ること數等であるから、此等は誤解のないやうにしなればならぬ。新しい脱脂綿などは、消毒せずに用ひて差支が無いやうに考へて居る人もあるが、これは大なる間違ひである。脱脂綿は普通の綿の脂肪を取つてあるだけで、別に消毒してはないから、使ふときには



妊娠より分娩まで  
 一應消毒の必要がある。一體消毒と云ふと非常に面倒なことにやうに世間の人は考へて居るが決してさう面倒なものてなく慣れて了へば毎朝の齒磨き洗面と同様である。消毒は小さなものならば御飯蒸しの中でも出来るしまた大きなものは日本在來の釜でも出来るしまた物によつて薬液に浸して消毒するものもあるが何れにしても餘り大した面倒の無いもの故一應醫者から聞いて消毒の習慣をつけて置くがよい。

お産の時に大便や小便が溜つて居つては分娩の邪魔になるばかりでなく分娩時の壓迫の爲めに不隨意に便を洩らしては外陰部を穢し、爲めに傳染の危険を誘ふことがあり或はまた場合によつては直腸膀胱等を損傷するの虞もあるから分娩前即ち産床に入るときには必ず排泄するがよい。

お産の始まる前には害にならぬものならば産婦の好む消化の良きものを少しづつ與へても宜しいが陣痛が劇しくなると大抵は食欲が無くなるから強ひて食べさせるの必要はない。けれどもお産が長びくとか或は異常分娩等の爲めに産婦が衰弱するやうのことがあつたならば折を見て牛乳スープ、米湯、卵黄茶、シトロン等の少量を産婦の好みに應じて與へるがよろしくまた産後に疲勞を感じ或は力落ちのしたやうな感じのある場合には矢張此等のものを適宜與へるがよろしい殊に此の場合には少量の赤酒等は效を奏するものである。

### 第二編 産褥の生理と其攝生

#### 第一章 産褥の生理

醫學上に産褥期と云ふは、お産の終つた時から、お産の爲めに出來た



妊娠より分娩まで  
 創傷がすつかりと癒り、そして妊娠と分娩との爲めに起つた生殖器の變化が全く恢復する迄の期間を稱するのであつて、その時日は普通に経過すれば六週乃至八週である。此の時期は自ら哺乳せざる婦人にあつては、月經の再び來潮することによつて判るものであるが、哺乳する婦人にあつては、哺乳期間は月經の無いのは普通であるから、外間から之れを識別することは困難なるも、普通の経過を取れるものにあつては、先づ六週乃至八週を経れば、産褥期が終つたものと認めてよろしい。

産褥時には、二つの大なる作用を持つて居るものである、即ち一は生殖器の舊に復すること、今一つは乳腺が完全なる分泌を初めて以て、初生兒に第一の食物を供給し之を哺育すると云ふことである。

子宮は、その内容即ち胎兒及びその附屬物を排出してから、引續き收縮を營み、子宮の内面一面に出來た創傷は漸次快方に向ひ、出血も亦少くなる。此の子宮の收縮は時として可なり強き疼痛を伴ふことがあるが、後陣痛と稱するはこれであつて、三四日間これに苦しむ人もある。これは初産婦には左程強く感じないが、二度目のお産よりは痛みが相當にある、そして何れの場合にあつても哺乳すれば哺乳しない時よりは痛みが劇しい、即ち哺乳すれば子宮の復舊は早いと云ふ證據である。また子宮の容積は二日の後には、分娩直後の時の四分の三となり、第一週の終りには二分の一となり、第二週の終りには約三分の一となり、そして六週間に至れば大抵收縮し得るだけ收縮するものなるが、處女時代に比べるとその容積は餘程大きくなつて居るものである。それから分娩後十日位の間に、お腹をいぢつて見て、大きな瘤があると云ふて心配する方もあるが、此の瘤は即ち胎兒の入つて居つた子宮なので、決

妊娠より分娩まで

縮を營み、子宮の内面一面に出來た創傷は漸次快方に向ひ、出血も亦少くなる。此の子宮の收縮は時として可なり強き疼痛を伴ふことがあるが、後陣痛と稱するはこれであつて、三四日間これに苦しむ人もある。これは初産婦には左程強く感じないが、二度目のお産よりは痛みが相當にある、そして何れの場合にあつても哺乳すれば哺乳しない時よりは痛みが劇しい、即ち哺乳すれば子宮の復舊は早いと云ふ證據である。また子宮の容積は二日の後には、分娩直後の時の四分の三となり、第一週の終りには二分の一となり、第二週の終りには約三分の一となり、そして六週間に至れば大抵收縮し得るだけ收縮するものなるが、處女時代に比べるとその容積は餘程大きくなつて居るものである。それから分娩後十日位の間に、お腹をいぢつて見て、大きな瘤があると云ふて心配する方もあるが、此の瘤は即ち胎兒の入つて居つた子宮なので、決



して驚くには及ばぬ。  
 子宮の収縮するに連れて、その他の組織も亦退行機能即ち収縮をするものである。即ち腹膜は子宮の収縮に連れて多数の皺襞を生じ、皮膚の静脈の怒張も去つて了ひ、色素の沈着も褪せし、また妊娠腺は白くなつて残り、腹壁は弛緩して澤山の皺襞が出来る。数多の血管は單純の壓迫若しくは内膜の肥厚によつて荒蕪せられ、或はその容積が著しく狭くなつて来る。その他筋間結締織、淋巴管、神經なども皆退行變性を來し、韧带は萎縮し、卵巣と喇叭管とは漸次に本來の形狀に復するものである。

産褥期に、外陰部から出る排出物は悪露と稱するものである。その大部分は子宮の創傷面の分泌物であるが、その他にまた頸管、膈、外陰部の創液を混するものであつて、主として脱落膜の殘片、血液、粘液等より

成り立つて居る、そして産褥の始め二三日間は、悪露は甚だしく赤色を帯びて居るので、之を血性悪露と稱して居る。第四五日以後には赤色を帯びてその色は甚だ稀薄となる、これを漿液性悪露と名づける、十日後には黄色を帯びて牛酪様になる、これは白色悪露と稱するものである。悪露は褪せするに従つて、その量も亦減ずるのが常である、産褥第二週中に若し臥床を離れて運動をすると新しい血液を混ざることがある故、早期の運動は禁物である。第三週に至ればその分量は甚だしく減じて、第四週乃至六週には、その分泌は全く止まるものである。或る人の計算によれば、最初八日間の悪露の分量は約一千五百瓦(九合)の多量に達したと云ふことである。尤も乳汁を飲まして居る婦人は、飲ませぬ産婦に比べると、その量は少く、また發汗、下痢等があれば矢張その量を減ずるものである。その反應は亞爾加里性若しくは中性にて、



悪露は臭くない

妊娠より分娩まで

終りには酸性を呈するものである。

以上は主として醫學上の觀察であるが、此處に最も注意すべきことは、悪露は決して臭くないと云ふことである。尤も一種血性の臭氣、俗に云ふ血なま臭いものではあるが、臭氣即ち腐敗性の臭みを帯びて居るものではない。若し萬一にも臭氣を帯びて居るやうならば、それは何か病氣のある徴候であるから、かかる場合には、速に醫師の診察を受けねばならぬ。

泌乳腺の分泌

乳腺の分泌機能は、既に妊娠中に始まつて來るが、産褥第二日乃至第四日に至れば、乳房は腫脹し緊張して硬固となり、段々と痛みを覺えて來る。そしてこれを壓迫すれば黄色の小滴を混じて水の様な分泌液を漏らす、これは初乳と名づくるものである。それから日を經るにつて、分泌の量は段々に殖えて來て、第三日乃至第四日に至れば、茲に初

少量の減少

めて眞乳の分泌を見るものである。

分娩すれば無論母體の體量を減ずるものである。バウム氏が獨逸國ウオンケルの産院に於て計測したのを見るに、平均六千二百四十二瓦約一貫六百六十六瓦を減ずるとのことである、そしてその割合は

胎兒	三千二百六十五瓦
胎盤	六百二十八瓦
羊水	千三百瓦
血液	三百〇八瓦
大便	三百六十瓦
肺及び皮膚より蒸發	三百七十五瓦

となる。尤もこれは我々よりも體格の偉大なる獨逸人に就ての計算故、我が日本人にありては、多少これより少からんと思ふ。

第三編 産褥の生理と其攝生



体温

脈搏

呼吸

發汗

妊娠より分娩まで

一〇六

産婦の体温は規則のやうに二回ほど昇る。第一回の昇騰は分娩後十  
 二時間に發する。第二回の昇騰は分娩後第三日乃至第四日に發す  
 るが、その昇る度は僅かに〇二度乃至〇三度位のものであつて、決して  
 これより高く昇ることはないから、若し三十八度以上になるやうなこ  
 とがあつたならば、それは無論他に病氣のある爲めであつて、決して生  
 理的ではないから、斯様の場合には、速に醫師の診察を受けねばなら  
 ぬ。

脈搏は靜かになる。健康人は一分間に平均七十五位としてあるが、産  
 後は七十、六十甚だしきは四十位になることもある。

呼吸は分娩を終ればその數遙に少くなる。即ち一分間十四乃至二十  
 呼吸位で、肺活量も増し、胸廓の擴張力も強くなつて来る。

分娩後八日ばかりの間は發汗がある。眠つた度毎に汗が出るから、餘

兩便

食慾

一般攝生の

り厚着をさせぬやうにせねばならぬ。

大便は、最初二三日の間は秘結するものが多い。また小水は初め八  
 日間割合に多く、その度數は一日二回乃至四回位が通常である。

食慾は初め五六日間進まぬが、授乳するやうになれば進んで来る。  
 産褥の初めは渴き甚だしきもの故、麥湯、番茶、牛乳、サイダ、シトロン類  
 を適宜與へるがよい。

## 第二章 産婦の攝生法

産婦は前にも云ふ如く、生殖器に大なる創傷を受けて居るのである  
 から、それを取り扱ふ人は、丁度怪我人を取扱ふ時の如く、消毒その他に  
 注意を拂ひ、子宮及びその他の臓器の恢復に都合の良いやうにしなけ  
 ればならぬ。婦人科の病氣の大部分は産褥時の不攝生と、月經中の不



妊娠より分娩まで

一〇九

攝生に基くものであつて、殊に産褥中の不攝生は、將來その人に大なる  
 障害を與へるものであるから、假令安産で、そして氣分に變りが無いと  
 云ふても、正規の時日は安静を守り、決して無理をしてはならぬ。  
 産婦取扱ひの方法を一通り述べれば、先づ無事にお産が終つたなら  
 ば、直ぐに外陰部を綺麗に消毒して、分娩の爲めに汚された臥床、寢衣の  
 やうなものは悉く之を取除け、その代りに清潔にして柔軟なものと  
 取り代へるのである。此の取り代へる衣類は、夏ならば別に温める必  
 要も無いが、冬ならば體温位に温めてやるがよい。また昔風の家にあ  
 つては、産婦は風邪を惹き易いから、成るべく厚着させるがよいと云ふ  
 て、重い程、夜具や何かをかける向きもあるが、これは元より不必要のこ  
 とである、さも無くとも産婦は前にも云ふた如く、發汗し易いものであ  
 つて、發汗が多ければ、反つて皮膚を弱くして、風邪を惹き易くなるから、

よくその適度を得るやう、即ち産婦の氣持のよい程度に着せるがよい。  
 外陰部の消毒が終つたならば、今度は殺菌せるガーゼ、或は脱脂綿の  
 類を以て局部を覆ひ、その上に丁字帶即ち俗に云ふオムツを施して置  
 く、そして一日三四回づゝ取り代へて、何時でも清潔になし、大小便排泄  
 の後は特に注意して清潔にしなければならぬ。尙ほまた殺菌した布  
 片を臍から膝にまで達する位に被けて置くのが一段とよろしく、普通  
 分娩後三十分位はじつとして産婦の経過がよいか否いかを監視し、い  
 よいよ経過が良好であると認めたらば、初めて腹帯を施し安臥させ  
 るのである。  
 臥床は成るべく大きく軟かにして清潔なるがよろしい、そしてこれ  
 を空氣の流通のよい適度の温度ある産室内に設くるのである。よく  
 ある室内を暗黒ならしむることは、不必要なるばかりで無く、反つて害



を及ぼすものである。新鮮なる空気の流通と光線の射入適宜の温度とは、創傷の治癒と、體力の恢復に對して極めて必要なことであつて、これが無ければ、いくら善良なる食物を與へても、その結果は思はしくない。然し、いくら空気の流通が良いと云ふても、風の吹き通しも感心しなければ、光線の射入と云ふても、日光の直射も宜しくない、温度もまた發汗するほどではいけない、要はその中庸を得ることであつて、これと同時にまた室内の乾燥と云ふことも大に必要である。

枕の注意

都會の地にあつては、滅多に無いことであるが、田舎の舊弊の家に行くと、お産の時からして大層高い枕をする習慣の處があるが、一體分娩及び産後を通じて、出血の量はなかく、少くないもの故、餘り枕を高くすると、腦貧血を起すことがあるから、枕は決して高くしてはならぬ、寧ろ低くした方がよい。

安眠

産後には、産婦は大抵は疲れてよく眠るものであるが、成るべく騒々しき避けて、充分安眠せしむるがよい。尤もこれは、獨り分娩直後に限らず、産褥の全期を通じて、安眠は最良の慰安と恢復となるもの故、充分安眠せしむる様注意を拂はねばならぬ。

飲食物の選擇

飲食物の選擇は、前に妊娠中の攝生で述べた通りを守ればよろしい。尤も分娩の當日には、牛乳、スープ、鶏卵、葛湯または白粥に食鹽か鯉節の味噌汁等の流動物を與へるがよい、そして三日目位になつて、少し食慾が出て來たならば、鶏卵の半熟、脂肪の少ない新しい魚類、それから追々と軟かい御飯、素麵、饅頭、鶏肉、漬肉、煮た果物等を與へ、経過が良かったならば、三週間目からは、妊婦の條にある禁忌食の外は何を與へてもよろしい。所によつては、産後乳汁が出るのだと云ふて、餅を食せるところもあるが、習慣になつて居るのなら、食べさせても差支が無い。總じて



食物は滋養分多くして成るべく消化が良く、然も刺戟せざるものを選び、み與へ、飽食と夜間の間食は慎まねばならぬ。尤も授乳中の産婦は一日晝夜五六回食しても差支がないが、夜食は遅くも十一時頃に攝りてその以後は食べぬ方がよろしい。飲料は牛乳が第一で、殊に哺乳中の婦人が之を用ひれば乳汁の分泌が多くなり、然もその質が良くなる。云ふ特點がある。それから麥湯、白湯、薄茶、番茶、薄き砂糖湯等もよろしく、濃き茶、コーヒ、強き酒等は禁物である。然し産婦が平素酒客であるならば少量の葡萄酒位は與へても差支が無い。

産婦の取扱は所により甚だ異なるもので、お粥と鹽ばかりを食べさする食もあり、反對にまた乳汁が出ぬと云ふて鹽氣の物を禁ずる人もあるが、何れも有害無益である。

大便は、分娩後三日位経つても通じが無かつたならば灌腸するか、或

兩便の注意

産後の體位

は緩下剤を用ひねばならぬ。灌腸は下手にやると害を殘すものであるから、産婆に頼んでリヌリン灌腸を施して貰ふがよい。

小水は、産後仰臥の位置では、慣れぬ人は出ぬことが間々あるが、斯様の場合には下腹を手にて壓して努責を助けるか、または外陰部に綿布を當て、これに薄き消毒液の温めたるを注ぎかけると排泄を促すものであるが、若しどうしても出ぬやうであつたならば、カテーテルを用ひて排泄せしめねばならぬ。カテーテルを使用するには、熟練と消毒の嚴重とは最も大切なことであつて、之を怠るか、或は下手にやると、その爲めに反つて膀胱加答兒などを起すことがあるから、よく熟練せる人に施行して貰はねばならぬ。

産後は成るべく安静にして居る方がよろしいのであるが、それに就ては幾日間安静にして居れば良いかと云ふに、これもその人の生活状態



態習慣并にその人の健康如何によること故、これを一定することはなかなか困難のことであるが、一般に云ふと、最初の一週間は床中にじつとしてゐて起坐することは許さぬのが法則である。さうして最初の二三日間は仰臥の位置がよろしく、三四日目からは側臥しても差支へが無い、これも右側から臥始めて、後には静かに右左取かへるがよろしい、餘り仰臥してばかり居ると、子宮の位置に變化を來すから、體位を靜かに時々取代へるがよい。また食事や授乳の際は、仰臥のまゝでは無論工合が悪いから、適宜に體位を變じて差支へがない。近來は産科醫の間に、産後永く寝て居るよりも、早く起きる方がよいと云ふ説を唱へ、かうすれば子宮の收縮も早く、惡露の排泄もよろしく、從つて肥立も良いと云ふ報告を出した人は、澤山にあるが、大勢は未だ寝て居るに屬して居るやうである。

運動に就

歩行を許す時

眼の使ひ方

それで先づ普通には一週間目までは寝て居ることとして、二週間目からは、時々床の上に坐つてもよい、餘り大事にして寝てばかり居ると、子宮の整復やその他に故障が起つて來ることが無いとも限らぬ、それから室内を歩行するには、惡露が全く血色を帯びざる頃、即ち八日目か十日目からがよろしい、そして此の頃からは起きたり坐つたり、歩いたりして、日を経るに従つてその時間を増して行き、全く床を離れるには三週間目からがよろしく、床を離れて仕舞つても、腹帯は當分即ち六七週間目までは着用して居た方がよい。それから友人の訪問、産時の見舞の回答禮などは六週間以上の後、旅行や平素の職業は、假令何等の故障無くとも、少くとも六七週の末からでなければいけない。

眼の使ひ方もまた注意を要するものである、産後無聊に任せて早く讀書したり、或は裁縫したりするなどは、非常に悪いことである、斯様の



妊婦より分娩まで  
 ことをして眼を疲らせると、第一視力が弱るばかりで無く、時としてそれが爲めに失明することさへあるから、産褥より離れて平素の仕事が出来るまでは、斯様のことに眼を使つてはならぬ。

乳房の保護は、授乳する婦人にありては最も大切なものである。乳嘴は時として怪我をすることがあるから、分娩前からアルコールを以て屢々洗拭して上皮を丈夫にするがよろしい。尙ほ授乳の前後は清潔なる水か、または三十倍の硼酸水等を以て乳嘴を洗滌し、また初生児の口腔をも同時に清潔な水をガーゼに浸して洗拭するがよろしい。然し此の際に不潔なる手指、殊に悪露等の附着して居る手指で觸れてはならぬ。若し不潔の手指で觸れると、表皮に出来て居つた微細の創傷からして容易に傳染することがある。それからまた乳房が腫脹して疼痛を發する場合には、上に擧揚するやうに軽く繃帯するか、或は硼酸水

の温濕布を行ひ、將來授乳の婦人は、此の際に乳汁を搾るか、吸ひ取るかすると、大層樂になつてよろしいものであるが、乳汁を飲ませぬ婦人ならば、少し位は苦しくとも、乳汁を出さぬ方がよい、一度搾り出すと、それは容易に分泌が止まらないで、反つて後が苦しいものである。

産褥中は、房事は禁物である故、若しこれを犯せば、常に生殖器の恢復を妨げるばかりで無く、將來婦人病を起すの遠因となるものであるから、生殖器の退行變性を終りて、全く恢復するまで、即ち六週乃至八週の間は、嚴に之を慎まねばならぬ。

それからまた俗には七十五日と云ふて、感心に制慾して居るかと思へば、一方に良人は花柳の巷に入出入するなどあり、その結果家庭に花柳病を輸入することになるから、制慾も無論徹底的でなければならぬ。

また若し花柳病の感染を受けたときは、早期に治療することが必要



の注意である。

昔は月経時及び産褥中の婦人は不淨なりと云ふて男子は是に近かず、上古にありては産屋を建て、妊産婦を別居せしめたのであつたが、これは迷信より出たこと、は云ひ乍ら、此の點に於ては衛生法に適つて居る。西アフリカのシオラレオンの土人は、生兒の自ら走り得る前に、その良人と同居同食することを以て大罪と信じ、東アフリカでは女子妊娠すれば、その生兒の自ら言語を良くするまでは良人と全く別居しななければならぬ、さうでないとその兒は死するか、或はよしその兒が幸ひに死を免れても必ず大害の來るべきを信じて居る。また常例として生兒の三歳乃至四歳を過ぐる前に復分娩するときは、これを公共の侵犯となす土地もある。支那でも上流社會の人は、産後一ヶ月の間は、決してその妻と言語を交へず、且つ産婦の家を訪ふことは斷じてな

精神の安

いなどは、これに關する一般の風習であつて、歐洲にては一般に産後六週目に産褥を上げて會堂に赴く、丁度日本のお宮参りであるが、これが濟むと始めて良人と同食を許され、またその職業に就ても良いと云ふことになつて居るのであるが、要するに生殖器を休息せしむるの期間が長ければ、長い程それだけ健康に良いのである。

精神を安静ならしむると云ふことは、産婦に取りては最も大切のことであるから、總て精神を興奮せしむることは、良きも悪きも見聞きさせぬやうになし、最初二三日の間は、家族のもの、外は産室の出入を禁じ、嫁にありては成るべく實母か姉に來て居て貰ふ方が大層力になるものである。また家政上その他の煩はしきは一切産婦の耳に入れぬやうにするがよい。殊に良人の一舉一動は最も産婦の心に影響するものであるから、外泊したり、夜遅く歸つたり、または高聲で家人を叱



妊娠より分娩まで  
つたりなどは決してせずに、かめて温言以て産婦を慰むるが良し。  
月経は授乳せる婦人には一年間位無いのが常であるが中には分娩  
後二三月で之を見る人もある。若し唯一度だけ月経があつて、その翌  
月からはまた月経が止まつたと云ふ場合には、これを第二回の妊娠と  
見てよろしいのである。

### 附録 第一編

#### 無痛安産法

最近無痛安産法、即ちお産のときに陣痛なしに、否痛みを産婦が感ぜ  
ずにお産する法が発見されて所謂新しい女の間には大部歡迎されて  
居る。これに就て我が國に於て初めて無痛安産を發表した近江ドク  
トルが衛生新報誌上に記載せるものを左に掲げ、後にこれ關する學者  
の意見を載せよう(伊藤)

文明が進歩するに連れて、人の神経組織が複雑になり、華奢になり、従  
つて痛みに對しても過敏になつて、僅かの痛みにも抵抗し難ぬると云  
ふ様になり、その結果お産を恐れる人の増加したと云ふことは、西洋で  
もまた日本でも見る趨勢であつて、これは即ちお産の苦痛を厭ふ爲め



であらうと思ふのである。人によつてはお産の苦しみに激しく惱まされるかと、恐怖の餘りに妊娠の中絶を企てる人さへあつて、かういふ例は西洋には屢々行はれると云ふことを聞いて居る。

さる有名な女詩人も、此の難産に苦しまるゝ一人で、嘗て「悪龍となりて苦しむ、猪となりて啼かずば人の産み難きかな」と歌を詠まれたが、かういふ御婦人こそ眞にお氣の毒で同情の念に堪へない次第である。兎にも角にもお産の痛みは、一概に生理的であるとのみは云はれない。よしまた生理的であるとしたところで、科擧の力を以て此の惨めな苦痛を除くことが出来たならば、同情ある醫師として、當然之を行はなければならぬことゝ考へるのである。

一體産時の痛み、即ち陣痛が時をきつて痛むと云ふのは適當の時期に、一時痛みを緩和させて産婦に安静を與へると云ふ天の配劑とでも

苦痛を除く法

申すべきものである。中には痛みが弱くて一向にお産の捗取らない陣痛微弱と云ふのがあつて、一生懸命痛みを強くさするやうにしなればならぬのもあるが、また中には痙攣性陣痛と云ふて、刺すやうな絞られるやうな痛みを爲めに、産婦は悲鳴をあげて悶絶しさうに號泣しながら、然も一向お産が進まないといふやうな場合もある。此のやうな痛みの強い時には、麻酔劑を注射して、一時産婦の疲勞を癒すと分婉を促す薬を注射すると云ふやうなことは、當然執らねばならぬ事柄なのである。然るに近來かう云ふ婦人の苦痛を除く唯一の方法たる、つまり妊娠婦人の福音とも申すべき安全なる無痛安産法が産れて居る。現に西洋でも盛んに行はれて居るばかりで無く、私自身も多數の實驗を経て、確に効果があることを認めて居る。此の方法によつて御婦人方が夢現の間に安々とお産が出来たら、その方の御喜びばかり



妊娠より分娩まで

一二四

りではなく、我々醫師としてこんな愉快なことではない。私は自分の實驗上、確かに此の方法が効果あるものと信ずるのである。

此の方法は今始まつたものではない、今より六七十年前に既に試みられて居つたもので、ヴェクトリア女皇なども、クロホルムと云ふ薬を吸入して無痛産をせられたと云ふことである。然しこれが改良に改良を加へられて完全になつたのは近來のことである。抑も無痛安産法を企てた元祖とも云ふべき人は英吉利のシムプリンと云ふ人であつて、此の人が初めエーテルを吸入せしめて、夢現の間に安産をせしめやうと企てた、同氏の熱心は偉いもので、ヴェクトリア女皇陛下の侍醫に任ぜられた時、或る人がお祝ひの言葉を述べても、耳に入らぬ様子なので、怪しんでその理由を尋ねると、今日エーテルを用ひて無痛に安産をした人があるの、嬉しくして、侍醫に任ぜられたことなどは考

へて居られぬ」と答へたさうである。これは今でも有名な話で、同氏の功績は今日ロンドンのウエストミンスター寺に表彰されて居る。シムプリンの歿後は、バランチンなど云ふ英吉利の産科學者が研究して居つた。また米國の方にも試みられて居つたのである。その後新しい麻酔劑が発見されたので、それを應用して、愈々無痛安産法が完全となつたのは、今より約二十年前、獨逸のフライブルク市の大學教授クレーニヒ博士、スタインピウヘル博士などの研究の賜である。博士等の方法は、麻酔劑を注射して、産婦を睡眠状態に陥れ、夢現の間に分娩を遂げさせやうと云ふ方法である。

無痛安産法を行ふ場合には、先づ産婦の室は薄暗くして、窓には暗色の幕を張り、晝の中でも室内は夕暮のやうな状態を呈させるのである。かうすると妊婦の心は静かになつて、未だ注射を施さぬ前既に半睡眠



状態になつて来るのである。さうして陣痛の烈しくなつて来る適度の時期を見計らつて、第一に一種の薬を一二回注射し、次で今一つ別の薬を續けて注射して、産婦を夢現の間に止めて置くのである。勿論此の時には、外界の刺激は絶対に避けなければならぬ。此の時の状態は、恰も夕暮のやうであるから、フライブルクの暮靄睡眠安産法とも稱せられて居るのである。そして此の夢現の暮靄睡眠の間に、お産を済ませようとするのである。一寸聞くと極く簡單で、誰にでも出来さうのやうに思はれやうが、中々そんなわけには行かず、いろ／＼面倒なことがある。第一、産婦に對する麻酔の程度に至大の注意を拂はねばならぬ。遠い過去に於ける記憶を復現する能力と感覺とを失はぬ程度でなければならぬのである。そして一方に於ては、眠りから醒めないやうにしなければならぬのであるからして、薬剤の分量と注射時間との關係には、

特別の熟練が要るのである。それで此等の注意を怠らずに、十分に熟練した醫師が之を行へば、此の無痛な産法は、最も安全に最も確實に出来るのである。私がミュンヘンの婦人科教室に居つたとき、毎日々々幾人ともなく此の方法で安産を遂げ、やがて日を經ていそ／＼歸る婦人に遭つたものである。

私が歸朝以來、此の無痛安産法によつて、無事にお産を済ませた人が澤山あるが、先年懇意して居る或る有名な女詩人が、此の方法で安産され、常に有名な人だけあつて、その模様が新聞に出ると、ひどく世人の注目を惹いたものと見えて、その後と云ふものは、此の産法に就ての質問が諸方面から頻々と來て居る。それで私は無痛安産法と云ふことは、現代婦人の痛切なる要求ではあるまいかと云ふ念を益々深くしたのである。苦痛を免れやうとする心は、男も女も同じである。忍耐強い婦



人方は女の役目として苦痛を忍ぶが、若し男子がそれ丈の苦痛を受けなければならぬとしたならば、恐らく女子よりも数層強く恐怖を感じてあらうと思ふ。若い女が頭腦を働かすと同様に、肉體の苦痛に對しては、耐へ得ないほど激しく戰慄する様になつたのは、寧ろ自然の結果とでも云ふべきで、醫師の大に同情せねばならぬ點であらうと思ふ。ところが或る思想家の如きは、お産の苦痛を忍ぶのは昔から日本婦人の美德の一つとして居るところで、如何に醫學が進歩して、信頼すべき方法が發明せられやうとも、之れを行ふのは、日本婦人の美德の誇りを傷けるものだと思ふ。また一方醫學界からは、無痛安産法は、お産の進行を遅れさすもので、不自然であるかの非難も起つたやうであるが、私をして云はしむれば、それは無痛安産法を施す醫師の注意が足らぬ結果に

外ならぬので、安産法そのもの、非難とはならぬのである。前にも云つた如く、熟練を経たものが、十分の注意をさへ怠らなければ、安全に無痛に、夢現の境に於て、苦痛も、恐怖も、感ぜぬやうに、お産をさせることが出来るのである、それを無經驗の醫師が不注意に取り扱つたりするので、飛んだ間違ひも起るのである。

無痛安産法の完成に就ては、前申したスタインピウヘル博士などが非常に苦心されたのである、それまでには、随分といろく、非難もあつた、即ち麻酔が中途で斷絶するとか、或は産婦を全然人事不省に陥れてしまつて、筋肉作用をも併せて麻痺させるとか、或は死産を多くする傾向がありはしないかとか、種々の物議もあつたが、私等が少數ではあるが、今迄取扱つた経験では、勿論生兒には何等の障りもなければ、また母體に危険を與へた例も嘗てない。これを泰西に見ても、例へばヤ



シユケンと云ふ學者が先年發表したのを見ると、四十五名の産婦に、無痛安産法を行つたが、何れも此の注射によつて痛みを覺えずに、お産を済ませた。脈搏の工合もよし、呼吸の工合もよし、お産の時間の長びくこともなく、筋の收縮作用も更に弱くならない。産婦はまるで苦しみが無く、生兒にも少しも變りは無かつた。此の注意の爲めに後出血の起つた例は無く、産褥に於ける腸や膀胱からの障害もない。母乳の分泌に障害を來さないかといふことも無かつたと云ふて居つて、甚だ良好なる成績を擧げて居る。(近江氏脱稿)

要するに  
一段の  
研究を  
今要す

以上の説によれば、何れの方面より見ても、無痛安産法は、完全無缺のやうに思はれるが、これは無痛安産法を高唱する人の特説として、かくあらねばならぬのであるが、翻つて我が國に於ける諸家の意見を徴するに、それは子供を要らなければ格別と云ふことに一致して居る、つ

まり無痛安産は死産を多くすると云ふ非難は免れないし、母體にも多少の危険がある。また笑氣瓦斯を吸入せしむる無痛安産法なども發見されて、此等に就て學者が頻りに研究中であるから、追々に其の完全無缺なる方法が見出さるゝことであらうが、今日のところは要するに未だ研究時代と云ふべく、今一段の研究を要すると云ふて差支が無からうと思ふ。



### 附録 第二編

#### 受胎制限論

##### 第一章 歐米に於ける受胎制限と

###### 新マルサス論

生産制限  
同盟會

歐米諸國に於ては最近生産制限同盟會なるものが設けられて専ら避妊法を講じ男女の結婚後五年間は之を行ふことが通例であり殊に和蘭は最も盛んな國で各所に避妊相談所なるものがあつて政府保護の下に既に四十年來經營されて居り然も此避妊法を行ふ上流社會に於てはその産兒一千人中僅かに十一人の死亡率を示すのみであるにも拘らず避妊の行はれて居ない下層社會の出生兒は百人中十人の死亡率があり即ち約十倍の死亡率を示すので益々避妊が實施せられつ

其理由

つあるとは昨年歐米を視察して歸朝せる生江内務省屬の談片の一節である大日本私立衛生會雜誌による然してその理由とするところは

- (一) 生活問題の爲め
- (二) 子女の多きは十分の教育を施し難きこと
- (三) 生兒の多きは育兒上その健康を害する虞あること
- (四) 母性の健康美容を傷ふこと
- (五) 享樂主義に據ること

等である。我が國に於ても近來此産兒制限が識者の間に大分論ぜられて來た吾人も少しくこれに就て研究を試みよう。

産兒制限を説き或は之を實行する人はその遠因はマルサスの議論に基いて居るそれは十八世紀の末葉英國にマルサスと云ふ學者が出て自然界の一切の生物は人間も勿論常にその食物範圍以上に増殖せ

マルサス  
論



んとする傾向あることを發見し、此前提から出發して次の如き結論に達した。

(一) 此不斷の傾向の結果として、生物は常にその食物の不足に苦しまねばならぬ、自然界に種々なる悲惨があり、又人間社會に忌むべき罪惡貧困が絶えぬのは全くこれが爲めである。

(二) 故に人間社會より此等の罪惡貧困を根絶しやうと思へば、先づ一家を養ふ資力なき者が自らその情慾を制し、獨身を守り斯くの如き人口過剰の自然的勢力を防止せねばならぬ。

これは成るほど面白い説であつて、生物の増殖がその食物範圍の擴大よりも急速力であると云ふことは、今日尙ほ不動の眞理と見做されて居る。有名なる進化論の創始者ダキンが直ちに此の説を採用して、その深遠なる自然淘汰説を想ひ出した事實に鑑みても、此説が如何に

根柢深き事實に立脚して居るか判る。然し此の説の結論として、多數の貧乏人に制慾獨身を慫慂したのは議論の存する點である。人間は元來慾望を持つて居るもので、その慾望の中でも食慾と色慾、即ち食氣と色氣とはその淵源が最も深い、即ち固有的であつて他の種種なる一時的の慾望とは著しくその趣を異にするものである。従つてこれは如何に強大なる意志力を以てするも到底絶對に之を抑壓することが出来ぬ、それにも拘らずマルサスは此慾望を抑制して以て産兒を制限せよと云ふて居る。此の無理な註文に對して眞つ先きに改善の聲を揚げたのが即ち新マルサス論者と稱する一團である。新マルサス論者は曰く、獨身の嚴守など云ふことは到底行はれるものでなく、また行はれたとしたところで甚だ有害無益のものである。そこで一方に獨身主義の缺點を補ふと同時に、他の一方に於てまたそ



の効果を収め得る方法は無いであらうかと研究した、かくして到達した結論は即ち避妊である。要するに避妊を一個の學說として公然世間に提唱したのは全く新マルサス論者の功績と云ふべきである。そこで此新マルサス主義の理論を一括すれば、左の三點に歸するのである。

- (一) 母體の健康の爲め、また産兒の發育及び教育の爲め避妊は必要である。
- (二) 自己の經濟力にて妊娠を制限するは國家社會の爲め貧困を除去し犯罪を減少する所以である。
- (三) 賣姪、墮胎、花柳病は獨身者の増加、晩婚者の増加に因るは明かなるも、之を救ふの道は一に早婚を奨励するにあり、而して早婚せば自然産兒の數を増加するを以て、それを避くるには避妊を實行する

より外に道がない。以上は新マルサス主義の結論である。果して然るや、以下少しくこれに就て研究を試みよう。

### 第二章 人口増加と社會問題

人口の増加は國家の爲めに利益であらうか、それとも不利益であらうかと云ふに、それは利益だとも云へれば、また不利益だとも云へる。先づ利益の方面から云へば、人口が少くしては國が守れぬ、國を守るには人が必要である、人數が必要である。勿論人數ばかりでは始まらぬ、人數が如何に多くても、その人數に使はれる武器や金力が貧弱であれば、敵と戰爭をしても容易に勝を占めることが出来ぬ。そこで富國強兵と云ふ言葉も出て來れば、武器の鍛練、豊富を競ふやうな傾向も生じて



妊娠より分娩まで

来るが、然し何と云ふても根本の力は矢張り人数である。尤も人数の一面には訓練と云ふことも大切である。人数ばかり多くても訓練の無い烏合の衆では役をなさぬ。然しながら今日の戦争は昔の戦争とは全く趣を異にして居る。昔のやうに一騎打ちで勝負を争ふと云ふやうな美観は、今日の戦争では逆も見られぬ。昔の戦争は云はゞ一個の熟練技術であつた。従つて昔は武術と云ふことが貴ばれた。武術は一個の専門技術である。昔は總ての職業を家傳として子孫々に傳へた。武術もやはり一個の専門技術であつた。家傳であつた。勿論今日の戦争には技術の大切な事は云ふ迄も無いけれども今日の戦争技術は昔の如く武術ではない。戦術である。今日の産業は一個人の特殊の技術熟練に重きを置かず、大仕掛の工場組織に重きを置いて居る。それと同じ理窟で、戦争も亦今では一個の大仕掛な企業と云つて

良い。従つてそれには武術に熟練した少数者よりも、多数の働き手が望ましい。百の荒木又右衛門よりは一萬の熊公八公が望ましい。それと無くては逆も今日の戦争のやうに數十里、數百里の戦線を守つて敵と輸贏を決することは出来ぬ。つまり今日の實戦の第一要件は、兵數の多いと云ふことではなからぬ。此の意味から云つて、人口の増加は確に望ましいことである。然し如何に兵數が必要なればとて、無から有は得られぬ。多数の兵を得ようと思へば、先づ多数の國民を造らなければならぬ。多数の國民を造るには、先づ生殖力の増加を計らなければならぬのは知れ切つた理窟である。

つまり國家の發展擴張は國民の生殖力を第一條件としなければならぬ。これは單に實戦の場合ばかりではない。戦後の殖民經營に於て



妊婦より分娩まで  
一四〇

も非常に大切のことである。假りに或る一國が戦争に勝つて、新に領土を獲得したとする。國家は斯様にして發達する。然しながら領土ばかり擴張しても、それを擁護すべき人が居なければ何にもならぬ。擁護ばかりではなく、その占領地に資本を投じて大に事業を起すと云ふ點から云つても、先だつものは人である。

また人口が多く、労働力が過剰して居れば、勞銀も従つて低下するから、事業を起す上にも非常に便利である。兎に角國家の發展を即ち健全なる帝國主義を實行する上に於て、人口の過剰と云ふことは非常に有利である。

然らば、人口の過剰は國家的に總て有利かと云ふに、必ずしもさうではない。國家の發展を目的とすれば、前にも述べた通り確かに利益である。けれども、翻つて國家の秩序維持と云ふ點から論ずれば、人口過

利は非常に寒心すべき現象と云はねばならぬ。何故かと云ふに、人口過剰の結果は、國民の生活負擔を加重する。之を一家の經濟に就ても、子供の數が多ければ、勢ひその暮し向きも困難になつて来る。そこで貧乏人の子澤山など、云ふ言葉も出て来るが、貧乏人に子が多いのではなく、實は子が多いから貧乏するのである。また一方には、社會に貧乏人が殖えれば、貧乏人の唯一の收入口たる労働が、需要供給の理法で自然に低下する。何れにしても、人口の増加が甚しければ、世の中の貧困程度も亦随つて甚しくなるのである。

また世の中に貧乏者が甚しく多くなると云ふことは、國家の秩序維持から云つて、非常に危険な現象である。第一に貧乏人が多くなれば、犯罪が殖える。犯罪の原因は必ずしも總て貧乏とのみは限らぬが、それにしては、犯罪の原因の大部分が貧乏にあることは疑ひを容れぬ。現



に、今日文明國に行はるゝ犯罪の大部分は經濟的原因から來てゐる。早い話が日本では年々五萬以上の刑法犯受刑者を出す、その大部分はいつも必ず財産に關連した犯罪である。試みに大正六年八月末日現在刑法受刑者の數を調べて見るに左の通りである。

窃盜	二二、六六八	毀棄隱匿	八〇
強盜	四五二	猥褻姦姪	三〇五
賭博富籤	一〇、五六三	傷害	一、九一七
詐偽恐喝	七、〇一四	殺人	七三六
橫領	三、四二一	逮捕監禁	二〇
贓物	九六六	墮胎	二七七
通貨偽造	八〇	犯人藏匿	
文書偽造	一、三九三	證據湮滅	一五

印證偽造	六六	公務妨害	一二五
偽證誣告	二一七	騷擾	二六
瀆職	七三	放火	六三九
略取誘拐	七九	住居侵入	二〇五
其他	一九七	計	四、三三一
計	四六、一八九	總計	五〇、五二〇

右の中上段は純粹の財産犯と目すべきもので、犯罪總數五萬五百二十の中、實に四萬六千八百八十九即ち九割以上を占めてゐる。勿論此の九割以上が總て貧乏の結果のみだとは云へない、その代りまた下段の殺人、傷害、放火などが主として貧乏のための犯罪であることも事實である。兎に角犯罪の原因の九分通りまでが貧乏から來て居ることは何人も



否むことの出来ない事實だらうと思ふ。して見れば人口の過剰が間接に犯罪の原因となることも疑ひを容れるの餘地は無いわけである。然し人口過剰の社會的弊害は、單にそれのみに止まらぬ。人口が増して一般の暮し向きが困難になれば、何人も先づ結婚を慎む。つまり結婚の結果、子供が産れて、此の上尙ほ生活難の甚だしくなることを恐れるからである。けれども結婚しないからとて、情慾の發動が止むわけではない、何とかして情慾の満足を得て行かなければならぬ、そこで賣淫が發達すると云ふ段取りになるのである。

尤も世には立派な有妻者で居て、買淫をするものも決して少くない。また賣淫制度の最初の發現は貧困とか、獨身増加とか云ふことよりも、寧ろ一夫一婦が發達して野合が困難になつた結果とも見られる。然しながら現在に於て賣淫の需要者の大部分が獨身者であることは争

はれぬ。また賣淫の發達は、花柳病の蔓延を助長することになる。婦人の花柳病の大部分が男子の不品行に起因して居ることは、動かし難き事實である。そして此の花柳病は單にその患者當人ばかりでなく、延いてはまたその子女にまで種々なる悪影響を及ぼす。學者の研究によれば、先天性癡愚者及び癲癩の約五割は、梅毒の遺傳があり、また發狂者總數の三分の一も同じく梅毒の結果であると云ふ。そしてまた心臟、關節など其他の疾病も亦梅毒と關係を有して居るものは少くない。

それから賣淫は、また賣笑婦自身の健康に悪影響を及ぼすこと大なるものである。一例を挙げれば、最近三十年間に於ける瑞典ストックホルム市の賣笑婦と、普通婦人の死亡千分率は左の通りである。

年次

賣笑婦

普通婦人



妊娠より分娩まで

一四六

一八七〇—七四	一七、一	一二、〇
一八七五—七九	二三、六	九、〇
一八八〇—八四	一四、七	七、六
一八八五—八九	一〇、九	六、四
一八九〇—九四	八、四	五、七
一八九五—九九	九、〇	四、八
一九〇〇—〇三	七、八	四、七

即ち賣笑婦の死亡率は、普通婦人に比して約二倍に相當する、これによつて見ても、賣淫が如何に人の健康を害するかが分る。

貧富の軌

人口過剰の弊害はこれ許りではない、人口が過増して、下層民の生活難が甚だしくなれば、彼等の道徳心も亦勢ひ荒んで來る、彼等は自己の境遇を敢果む餘り、自然に上流有福者の安樂を妬む、一方に多數下層民

食糧の缺

の貧困が増すと同じ割合で、上流富者の安樂が増進する、そこで下層民の嫉妬羨望が増長するのも洵に已むを得ざる次第である。かくて彼等は益々亂暴になり、破壊的になり、その結果遂には恐るべき危険思想にかぶれ始める、現に西洋などでは何時も此の問題に煩はされて居る次第である。

最近我が國に起つた問題は食糧の缺乏である。農商務省農務局長道家齊氏の談に曰く、大日本私立衛生會雜誌に據る、本邦主要食料米麥の現況は國內の生産を以て、その需要を充すこと能はず、年々相當の輸入を要し、その平年と認むべき一箇年の輸入超過高は米百六十八萬四千石、麥百萬六千石なるが、一方將來人口増加に依る消費量の増加をも推定せざるべからず、即ち現在の人口増加率により、將來の米麥消費増加を推定すれば左の通りである。



妊娠より分娩まで

一四八

米消費増加

麥消費増加

十年後	八、八二一 <small>千石</small>
二十年後	一八、九八四
三十年後	三〇、六九五

十年後	三、八二二 <small>千石</small>
二十年後	八、二二七
三十年後	一三、三〇一

故に以上現在の不足及び將來人口増加による消費増加を合計し、將來の不足高を示せば左の如くである。

米

麥

現在	一、六八四 <small>千石</small>	一、〇〇六 <small>千石</small>
十年後	一〇、五〇四	四、八二八
二十年後	二〇、五七九	九、二三二
三十年後	三二、三七五	一四、三〇七

勿論當局者が此の不足に對する補給策を講じつゝあるが、若し一朝

止と人口増加  
人口増加

外國と戦端を開き、輸入杜絶するに際せば、我國に於ける食糧の供給は實に寒心せざるを得ないのであつて、これまた人口過増に因する弊害の最も大なるものと見なければならぬ。

要するに人口の過増は、國家の擴張發展と云ふ立場から見れば、非常に有利であるが、國家の秩序維持と云ふ立場から云へば實に非常に危険な現象である。そこで問題は國家の擴張發展に重きを置くべきか、それとも國家の秩序維持に重きを置くべきかと云ふことである。そしてその重きを置く所に従つて、人口過増を歓迎することにもなれば、また排斥することにもなる。

またこれを歴史的に見ても、或る時代には帝國主義が流行し、或る時代には又國家社會主義が流行した。帝國主義の流行する時代には、自然に又人口過少難が慨かれ、『産めよ殖えよ』が叫ばれる。之れに反し



て國家社會主義が流行して、一國內部の秩序保安に重きを置かれる時代には、又自然に人口過多が慨かれ人口防止が行はれる。十九世紀の末葉以來マルサスの人口論が創設され續いて新マルサス論が勢を得たのもこれが爲めである。

ところが近代に於ては帝國主義と國家社會主義とが互に相關提携の實を擧げて來た。帝國主義は國家社會主義の歸着點であり、國家社會主義は又帝國主義の前提であると云ふ傾向が著しくなつて來た。其處で今日の文明國では、一方に人口過少を慨嘆するものがあるかと思へば、又一方には人口防止を絶叫する者もある、甚だしきに至つては同一人の口から時に或は人口増加が叫ばれ、又或る時は人口防止が主張されるやうな奇現象も現はれて居る。

### 第三章 家族制限と社會改良

左に記すは英國ロンドン市の理學博士ゾリスデールが記せる出産制限論の一節である。

マルサスの學說の承

マルサスの學說に曰く、人口の繁殖を防止せざるときは、その繁殖が急速に進みて食物の供給に追ひつき、斷えず之れに迫り、終には貧困と餓死と疾病と戦争とを惹き起すに至ると。そして第一流の經濟學者ジョン・スチュアート・ミルの如き諸大家は、此の說を以て答辯の餘地なきものとして是認して居る。此の說が一時世に忘れられたは近年のこのみである、即ち出産率の減少が始まつた以來のこのみである、また輸送の道が改良せられて後のことである、即ち外國より食料を輸入するに至りしよりの事である、また社會黨が自己の天下とな



らば萬人に不自由はさせずと公言せし後のことである。然しかる時期の間に於てすら各國より提供さるゝ年々の統計は、此のマルサスの原則の眞なることを例證し、死亡率によりて表はさるゝ社會情態の改良は、出生率の制限によらざれば所期し難きことを證明して居る、それにまた過ぐる數年來生活費は急速に嵩み來り、その結果一時多量の食物供給によつて息をついた情態も、北米合衆國その他に於ける非常なる人口増殖の爲めに元に復し、またマルサスの法則が再び認容され依頼さるゝに至つたのは、多數の人の認むるところである。聖パウロ寺の監督牧師の如きも、當問題は今や二三有識者否現代の思想界の泰斗の目に最も重大なる問題として映ずるに至つたことを極力主張して居る、これは人口過多即ち餘り高き出生率と餘りに少き日用品の現に事實なること及びそれが全ての社會的弊害の主因なることに最後

の保證を與ふべき證據としてあげられたものではないけれども、出生率と死亡率との進歩を知るものは、出生率を一千人當り二〇人だけ減ずるときは、今の死亡率千人當り一〇人だけ減ずることを得ると云ふことを氣附くであらう。此の計算はニュージーランド及びアウスタラリアに於て事實として表はれしものである。此の二國に於て貧困と窮乏とは殆んど見ることを得ざる有様である。斯くの如き分量の問題は暫く措くとするも別に質の問題がある、何人も知る如く、今日の最も重大なる問題は、社會の中に於て最も厭ふべき階級に於て出生率の高きことがこれである、厭ふべき階級とは懶惰にして雇傭に堪へず、無分別にして酒におぼれ、心身に缺陷多き徒輩の事である。此の事に就ては多數の人類改良論者殊に獨逸は教育あり、又成功せる階級者たるものよろしく多數の兒を生みて權衡を回復



し以て不適者を生存競争場裡より追ひ出すべしと主張して居るけれどもこれに對しては二つの故障がある第一は教育ある階級が之れに服従せずまた耳を傾げんともせざることこれである。彼等は自己及び子孫等は世に人口制限を普及することによつて如何に利益するところあるかをよく承知せる人である實に獨逸に於ても佛蘭西に於ても匈牙利又は英國に於ても匈牙利醫會の指摘せる如く産兒無制限を主張する人々に限りて自己の教説を實行せざるの結果を呈して居る。第二の故障は人道教の盛なる今日のこととて社會はその發展を殺がるゝに忍びざるものである不良の發展の爲めに苦しむ社會が却つて左様の抗議を提出するは實に不思議である良かれ悪しかれ社會は總ての人口を維持多くは最小限度の活力に於てせん爲めあらゆる手段を盡くし之れを出來得る限り繁殖せしめんとするものである。

果して然らば今日の如く人口の過剰し疾病の行はれ心身の墮落の行はるゝも亦宜なるかなである。メフェイストフェリースら今日以上の人種破壊策は有せないであらう不適者には十分の繁殖をなさしめて適者を阻害し適者は次第々々にその産兒數を制限して一意養貧院や病院や癲狂院やを維持して憐むべきものゝ爲めを計らんと企て居るがこれは人種破壊にあらずして何であるか。人種を改良せんとするには二つの道あるのみである即ち適者をして自己の繁殖力を増加せしめ一切不適者に對する助力を拒絶せしむるか佛國革命を追想せよ其勇氣も出るなり又は彼等をして不適者の繁殖を止めしむるか二つの中何れか其一ならんを要するのであつて假令一代の文珠の智慧を集めるとも此の外には道は無からう。即ち無制限に繁殖せしめて人情を棄つるか又は人道主義をとりて不適者の繁殖を制限するか



これである。最近の白痴令は後者を方針として採用せる最初の例である。借問す何が故に極端なる白痴に對してのみ斯く處置するところあるか、現に幾百萬の憐むべき心身兩方面の不適者があるではないか、若し人為的制限法を心得るか、またはそれが健康を害し、道徳を破壊するものなりと教へられざるに於ては、彼等は必ず自己と社會とを多數且つ虚弱なる子孫を以て煩はすことなきを得て、どんなに喜ぶか知れない。憐むべきは労働階級にては淺間しき境遇、乏しき収入のうちにて多數の子をあぐるの憂き目を免れんとし、生みの兒の半は寧ろ目前にて餓死せよかしと願ふ母もあることである、不適者の増加を防ぐの必要は何ぞそれ切なるや。

多數の白痴

また現に賣淫によりて恐るべき多數の花柳病が発生しつゝある今日に當り、そしてまたその中に白痴が多數に製造せられつゝある、今日

政策上の研究

に當り、偏に白痴を分離せんとするも何の效があるものではない、青年男女をして子を育つるだけの収入を得るまで待つことなく、適當の年限に達する時は直ちに結婚することを得せしめたならば、斯くの如き白痴の大原因も之を阻止し得べく、然もそれ以上の有效なる策は無い筈である。その實今日の教育ある階級者が家族制限の衛生的方法を自ら採用するに當つて、同じく之を貧民に周知せしむるの義務を盡したならば、最近の白痴令の如きものは不要であつたであらう。

次に少しく目前の政策上より本問題を研究して見よう。今日我が當面の問題の中には住居問題があり、都會集注問題があり、賃銀問題もあり、土地問題等もある、そして兩政黨は如何にしてこれが解決を行ふべきかに苦心中であるが、吾人は兩政黨の何れにも向背の態度を取るの要が無い、唯二三の簡單なる實例を提供すれば足るのみである。



妊娠より分娩まで

第一に住居問題を取つて見よう。吾人は一層良好なる住居設備を要すと云ひ、或は家賃を低くす可しと云ふが如き説に對して茲に是非を論ぜんとする者ではない、現に四百萬許りの労働者は一週或はそれ以下に二十五シリングの賃銀を獲るものなる事を知らば唯今の如き生活困難の時代に於てすら夫婦に子供一人二人の家庭ならば優に二室位に多少は體裁よき生活も出来ることであらうと想像せらるけれども子供の數がそれ以上に増すときは迎も覺束ない子供の數が増せば設備も増さなければならず、従つて其だけ家賃は高く出せぬと云ふことになるであらう、その結果二つの室は一つにして親子雜魚寝の有様ともなるのである。如何に設備を良好にし且つ廉價にせよと迫るとも、左の事實は之を如何ともすることが出来ぬであらう、事實とは他なし、此の問題が未だ決まらざる間——またその決まるには長年月

を要するならば——に於て、住居問題の最も緊急なる方面が一二年の間に、貧民の家族制限法採用によつて解決せらるべきことこれである。

次に賃銀問題に就て考ふるに、賃銀の最小限度を定むることの正しき、將た可能なるかに關しては、人の意見も區々であるけれども茲に唯唯試みて問ふべき一疑問がある、所謂最小限度の賃銀とは何ぞと云ふことである。これが若し一家族の賃銀であるとせば、一家族全體に就いて一人々々の最小生活費を規定するわけに當る、若し家族の數に制限を附せずして、その數の増加するに値すべしといふならば、各兒童一人當りの額を規定しなければならぬ。ロイドジョーシ氏若しくは他の最小賃銀主張者は、果して家族の員數に應じて賃銀の率を定めんとするか、ラウンツリー氏は一地方市にては、三人の家族が最極度の節儉



をなし、樂しみもせず、贅澤もせず、唯衣食一方のみにて生活すれば、一週二十三日シリング八ペンスにて足るべしと明示して居るけれども、ロンドンの如きは少しく高率を要するであらう。一體政治家が一週一弗二十五シリングの最少賃銀にすべしと喋々するのは、其實一家族は一人か二人以上の子供を造るべからずと云ふと同じ事である。さう云はないのは、偽りのみである。又是と同じ理にて、家内にて相當の住居設備あるべしと論ずるは、一家につき子供の二人三人分を供給すれば足るとの意を含むのである。それにも拘らず、彼等論者は労働者をしてその子孫の數を此の制限數までに止むべしとは一言も云はない。彼等とても貧者が一家に十人十二人の兒を有するは敢て珍らしからぬこと位は承知の筈である。また實際此の事實を知りたればこそ、彼等は之を政策上の議論ともするのである。結婚すれば無限に子を産む

ものと決めてかゝる間は、最少限度の賃銀論や住居論は當然子供の頭數に比例して之を供すべしとの論でなければならぬ。けれども自己の收入に應じて産兒の數を制限し、また多額の税を負担せる中流階級者は果して之れに同意するであらうか。

結婚とは反對なる獨身と云ふことについては未だ論及しなかつた、たとへ獨身生活が望まじきこととして、これにて前陳の難問題が解決すべきわけではない、既婚の人々が相變らず多數の兒を産む間は、何とも致し方が無からうからである。成る程マルサスの説きし如く、晩婚を奨励するもよからうけれども、晩婚と云ふは最も貧しき婦人ならば三十五歳又はその後まで結婚を伸ばすことを得べしとの意であらうが、それにしても尙ほ大抵六七人位の子供は産まれるであらう。然るに年老いて初めて結婚し、又は子を産むことは理想ではあるまい、



これは何人も然か思ふところであらう、今日の醫師にしても、僧侶にしても、獨身又は晩婚を主張する如きことがなければ、労働者に對して之を奨励するが如きことは尙更之れ無き筈である。然るに早婚は晩婚に比して理想的である、それは別として考ふるも、社會の賣淫制度の弊害を減じ、又は之を除くには早婚より外はない、他の手段は皆失敗であつたが早婚だけは成功する。然して一般に早婚を勧むることは如何にして行はるべきかと云ふに、如何に考ふるも無限に子供を産むの負擔を免れしむる方法を取るの外はない、そして若し制限そのことが必要にして、且つ道德的なりと考へられ、また實際その所期の如き効果ありと認めらるゝに、(和蘭にては結婚年齢は減じつゝあり、これと共に私生兒の出産率も死産の比例も減じつゝあり)至つたならば、從來の如何なる改良案よりも、社會の實際の道德的情態を向上するの效は確かに

存するのである。

今や何人も個人々々の間の話にては、現情寔に斯くの如くなるを十分に認めざる人が無いやうである、何れの家庭に就て之を聞くも、その父たり母たるものは、相當に子供に食はせ着せ、また之れを教育して、他日有用の公民となし、その個性を充分尊重することは、三四人以上も子供がありては難かしと、打明け話をせぬものはない、若し自己が備つた男女の窮せるを見ては、その子供の數さへ少くば大に樂なるべきに、何人も直ちに感ずるなるべく、左ほどまで多勢の兒を儲くるは如何にも愚ならずやと思はぬ人もなからうと思ふ。然るに貧民は産兒の制限のことなど全く知らぬものにて、偶ま之を知るものも、前來陳べし如きことにて脅かさるゝ爲め、思ひ切つて之を實行し得ざるものなりとは、何人も氣附かぬと見える。將たまた必要なる智識は之を貧民に



も普及するが人道にてもあり愛國にてもあることを知る人は世間に無いと見えるがこれは一つには因習に囚はれてのことであらう、また一つには家族制限が普及せば一國內に労働者又は兵士が減ずべしとの信念もあつてのことであらう。最も貧にして最も効率の少き労働者又は雇傭に堪へざるの輩が減ればとて一國に決して何等の損失あるわけのものではない。今日國內の智慧ありて効率多き人々は殆んど皆現に家族制限を行つて居るではないか、若しそれが悪いことであつたならば此等の階級が實行するは最も有害ではないか、況して此の知識を成るべく早く無能無力のもの、間に普及することは、その必要はより多くあるのである。リポンの僧正自らも一九一〇年の教會堂に於て「出生率の減少が無能無力の階級に行はるゝ事にして若し確證あらば吾人は此の現象を見て毫も憂慮せざるのみならず却つて高

尙且つ克己の理想の存する證據として之を歓迎すべきなり」と認めて居るではないか。

こゝに特に注意し置くべきことがある、それは家族制限と云ふことも自ら限りがある、それは合理的なる制限でなければならぬ、従つて少しにしても人口増殖力を弛緩せしめんとするものではない、佛國は其實例なりと稱して居る、然るに佛國に於てすら人口増加力の弛緩せしことなく、また將來その傾向も無い、人口の増加は残存による、出生によるではない、然して残存率は出生率の阻止すべき所に之を阻止するによつて大に増加し得べきものである。加奈太のオンタリオにては、前には千人當り十九人の出生率であつた、此の率は佛國今日の率と同じである、然るに加奈太はその時千人當り僅かに十人の死亡率であつた、従つてその自然増殖率は千人當り九人であつて、多數の歐洲諸國の今日



の現情と同一である。ペルチーオン博士の如き人々は、佛國の人口増加の遅々たるはその出生率の低きによると想像して居るが、此等の論者に對しては、何故に死亡率が千人當り僅かに十人に非ずして十八人なるかと問はざるを得ない。何人も知る如く「急がば廻れ」にて、吾人は出生率の増加によつて人口を増加せんとあせれば焦せるだけ益々紛糾錯雜に陥り、彌よ社會的諸弊害を複雑にし、益々人口増加の進みを遅うするものである。故に人口の増加にも他の事に於ける如く、「徐々に急げ」を金科玉條としなければならぬ。

の家族制限

和蘭は家族制限の長所を發揮し、之を政治家と醫師との協力によつて貧民階級に普及せしめたる世界唯一の邦である。そしてその結果一般死亡率及び幼児死亡率は減少し、體格は良好となり、人口は彼れが如き進歩を見るに至つた。此の和蘭の實例ある以上は、我が國に於て

死亡率の低下

も最も良好なる方法を取つて、貧民階級がその子孫を制限するやうに教育する事に、吾人の注意を集注するもよからうと思ふ。英米醫學協會の會長の言明するところに鑑み、吾が醫師諸君が自ら進んで此の業に當らんことを切望するものである。

前出第一表表略すは、吾が邦に於ける出生及び死亡率の變化を示せるものであるが、之を見れば出生率の減少せし三十五年間に死亡率は千人當り三十二より十二、三に下つたことが分る。またこれによるときは、現在の進歩の割合を以てせば、死亡率は一九二一年までに千人當り十人に下るわけである(即ちニュージラランド及び滿洲の現状である)。但しその場合出生率は千人當り二十人に下り居たらんことを要する。そして今の勢を以てせば、これもあり得べき事と思はれる。その時が至つたならば、殆んど衣食の爲めに幼児の死すること無き時代を



妊娠より分娩まで  
一六八

現出すべく、これ即ち最も悪き意味に於ける貧困の除かれし時代である、そしてその時代が一九二一年までに到達すべきは確實である、現今以上の努力が別に行はれずとも大丈夫である。またこれと共に確かなることがある、若し社會の有識者が此の事に於ける自己の責任を自覺し、家族制限法の切要ある處に於て之を實行させんことに助力せば、死亡率は五ヶ年間に千人當り十人に引下らるゝことを得るのである、それにも拘らず此の五ヶ年内に人口は現在よりも甚だしく増加する、何となれば吾人の制限しつゝあるは、無能者の増加であつて、能率の大なるものゝ増加ではないからである。

素より斯く短き期間内に貧窮状態が除かるべしと云ふは、少しく不合理的にも聞ゆるであらうが、公平なる考へにて生活の統計を研究する人は、如上の説の全く確かなることを認むるであらう。若しそれ人工

的制限が健全にして道德的のものなるか、將た然らざるを決定し、また之を然りと斷定せし場合に於て、之を民族の利益となるやうによく指導するが如き事に至つては、これ實は醫師及び教育社會の任務である、彼等の助力が無くとも既に不思議の事は行はれて居る、況して彼等の助力あるに於ては更に神秘不可思議の事が實現せらるゝに至るであらう。吾人は優人種學の先驅者たるサリービー博士の言葉を引いて本章を終らん、曰く「新マルサス派の助力によつて吾人の優人種學に述べし理想は達せられるであらう、即ち世に生み落される程の人の兒は、生れぬ先きより望まれ愛しまれしものに限らざるべからず」と。

#### 第四章 妊娠制限と風教問題

本章もまた前章同様ツリスデール博士の出産制限論の一節を譯せ



るものである。

第一 犯罪との關係

犯罪の問題を論ずるに當つて、先づ心得置かねばならぬことがある、即ちそれが法律上の問題なること、并に成文律に新法規を加ふるか又は舊法を廢するは容易ならざる差違を生ずる所以なることがそれである。近代の傾向はまた確かに刑罰を軽くせんとするにあるやうである。だから刑罰を受けしものを數へないで、有罪と決定されし者の數を見る方が捷徑である。これによつて見るに、吾國の道德上の進歩は最も喜ぶべき現象を呈して居る、マルホール氏の統計學字書によれば、人口百萬人につき有罪決定者の數は一八四一年より五〇年の十年間に一二八〇人なりしもの、一八九六年には二九九九人に下り、その後も斷えず低減しつゝあり、監獄委員の報告にして一九一一年に公にせら

れしものによれば、犯罪件數は一九〇〇年の一五二、五一一より、一九〇九年の一四一、五五五に下つて居る、然して人口は此の間に増加して居る、然るに一九一二年三月三十一日を以て終る一年間に於て、入獄者の數と一般公衆との比例は統計記録中最低のものに屬して居る、左に同委員の報告中より抜萃しよう。

こゝに喜ぶべき事あり、他なし、物情洵々の年に於て、而も或る地方に於ては、争擾事件も起りし年に於て、例年よりも人口に比例して少數のもの、各地方諸監獄の日々の平均在監者數は千人餘にして、前年よりも少數なりき。

同委員等は、また少年犯罪の數著しく減少せしことを以て注目すべき現象なりとして居る、十六歳より二十一歳までの男囚は、過ぐる二



十年間に一八〇〇〇より八、〇〇〇に減じ、女は同じ期間に四、〇〇〇より一、〇〇〇以下に減少して居る。

それは統計表には見えないことであるが、白き手袋事件の無きしるしに巡廻裁判の判事に渡さるゝことも著しく増加して居る。また例へば即位大典や銀行祝典の如き、公の祝ひ事のあつた折に警察事故の驚くべき少数なりしことは新聞の報導せる通りである。一般に法律や秩序を重んずるの念慮は、英國に於ては甚だ速に増加しつつあることは疑ひ無きことである。そして此の改良進歩の始まつたのは、確かに出生率減少の始まつた以前よりの現象であるけれども、その減少の続く期間全體に互つて此の趨勢が保たれたことは吾人の注目値するものである。

最も急激なる出生率の減少を見たのは濠洲である、即ち一八八九年

と一九〇八年との間に、千人當り三十五人より二十六人に下つた。濠洲便覽は官の發行に係るものであるが、一八八一年より一九〇八年までの間に有罪者は人口一萬につき六十九人より二十人に減じたことを擧げて居る、即ち從來の三分の一強の減少である。

此等二つの實例があるにも拘らず、家族制限が犯罪増加の弊ありと云ふが如きは無意味である。元より佛國に於て近來犯罪數の増加せしことは吾人と雖も之を認めないではない、然しこれは大に事實を疑ふべき理由がある、佛國一九一〇年の年報によれば、巡回裁判所に於ける有罪者の數は一八七三年より七七年まで五ヶ年間に於ける一年當り三、九〇〇人が、一九〇八年より九年までには、二、一八〇人に下り、人口は三千六百人六より三千九百萬人四に上つて居る。されば人口百萬に對する有罪者は一〇六より五五、五に下つた理にて、即ち半數以上



の低減である。コルレリシヨナル、シリビユール以前に於ては、有罪数は増加して居る。例へば一八七三年より七七年までは百萬人當り五〇五〇であつたが、一八九三年より九七年までは百萬人當り五、七五〇に増加して居る。そしてその後は低減して一九〇八年より〇九年までには五、一五〇に下つた。

素より吾人は佛國の法廷及び裁判官の極端に寛大なることを耳にせないでもない、けれども近來は著しく嚴格に傾きつゝあるやうであるが、それにも拘らず有罪者は減少の一方に傾きつゝある。兎まれば佛國にては餘程以前より家族制限が行はれて居つたわけなれば、現在は甚だ速に傳播せられつゝあるものではないと云ふことが出来る。然るにベルチーヨー博士のあげし例證は、犯罪その他の弊害は小なる家族よりも、大なる家族に多しと云ふことを證して居る。されば概して

之を云ふときは、何れにしても家族制限は、人民の犯罪を増加する傾向無きものと斷じてよろしいわけである。

第二 酒癖との關係

我が邦だけのことならば、別に統計表に徴せずとも、酒癖の改良は知り得らるゝのであつて、節酒及び禁酒の著しく行はれ來つたのは、萬人の均しく認むるところである。今日宴席に臨むもの、殆んど半数は炭酸水などを飲んで居るが、その祖父の時代までは三本倒したりなど、誇つて居つたものである。これだけ考へても酒癖の減じつゝあることは知られるのであつて、その實際問題に就いての統計表など、此處には餘り必要はない。泥酔は一代前迄は愛嬌ある弱點として考へられて居つたが、今日では容捨なく處罰せられる、それにも拘らず、泥酔の廉を以て拘引さるゝもの、數は次第に減少しつゝある有様である。



一人當り強酒の消費高も減少した、一八七六年には一人當り一ガロン二三であつたが、一九〇九年には一人當り〇、八ガロンに下つて居る。また麥酒の消費高は一八八一年に二七ガロン六であつたのが、一八九八年には三三ガロンに上つた、一八九八年は南亞戦争の前年であつたが、それ以後は急に減じて二六ガロンとなつた。然るに飲酒の原因にて死亡せしもの數は一八七〇年より一九〇〇年までに百萬人につき三十七人より百十一人に増加したけれども、その後は甚だしく急に減じて一九〇九年には、百萬人當り四十三人となつた。此の現象と出生率減少との間には殆んど何等の關係も無きことが明瞭である、然しこゝに奇妙なる現象がある、強き酒及び麥酒の最大なる消費高と飲酒の原因による死亡數の増加とは、出生率の減少せしことに原因しない、帝國主義及び愛國精神の高熱が南亞戦争によつて喚起されしに原

因せるやうである。

佛國に於けるアルコホルの消費高は漸次増加しつゝあるとは度々聞く話である、素より今日は三十年前に比し消費高の多くなつたのは事實であるが、一九一〇年の年報に見えた統計表によるときは、飲料としてのアルコホルの消費高は、一八八八年より九二年まで五ヶ年間に一人當り四リートル二であつたが、一九〇八年より九年までの二年間には三リートル四八に急下して居る。近來此の低下の傾向は殆んど大英國と伯仲の間にある。ベルチーヨン博士のいふ所によれば、佛國にては多數の兒童を有するものに飲酒癖が最も甚だしい、そして此事が幼兒死亡率と墮落との原因の最大なるものであるといふが、博士の意見である。然し利己主義と贅澤の風とは家族數制限に原因すると云ふに至つては聞き捨てならぬことである、吾人の見るところによれ



ば飲酒癖なるものは、多数の兒を持つ父親に多く、これに反し少数の兒を持つものは多くは簡易にして最も節酒的人である。

ベルチーヨン博士は曰く

飲酒癖の人は多数の兒を持つ者に多いと、出生率に關する予の質問に應へて多数の醫師は皆此説を爲して居る、オルンは飲酒家の多数なるところであるが、その醫師の如きは皆斷乎として此の説を肯定して居る、これは讀めたり、兒を設けざる佛人は過度に用心するが爲めである、飲酒するは過度に用心の無き人である。と。

素よりアルコールの消費を目して道徳と大なる關係ありと爲すに反對の人もあり、また飲酒癖が若しゾラの所謂シュブリーム、アムブレボイヤスス(崇高なる不謹慎)即ち無分別に子供を生み出す事の原因となるとするも、これは一の徳行と考へなければならぬと思へる向きも

少くないのは無論である。けれどもかゝる意見は天下多数のものには通用しない、また斯くの如く飲酒を道徳とするか不道徳とするかの意見は暫く論外とし、アルコールの使用が親の生殖細胞を毒して子孫の身心に最も有害なる結果を及ぼすべきは世間共認の事實である。

第三 細民との關係

妊娠制限と細民との問題は詳説の必要が無い、細民の窮状は種々の事情による事であるからである、唯茲に左の事實を認むるを以て足るとせんのみ。英蘭及びウエールズに於ける細民状態換言すれば年々救済を受けるもの、人口割は近來頓に低減し、一八七五年に人口千人當り三十四人五なりしものが、一九一〇年には二十六人四に下つた、即ち二割三分五厘の減少が出生率低減の時期の間に起つたわけである。これを以て見るも子供の數が減じて家計が樂になることは、世人の云



ふ如く懶惰放縱の原因とはならぬことを知るに足るのである。佛國農夫の勤儉貯蓄は世に知れ渡つた事實である、そして佛國だけが労働者の賃銀の近來増加しつゝある唯一の例であつて、我が國の如きは反つて一割五分だけ低下し、子を産むこと多き獨逸の如きは約二割五分の減少を呈せること、これまた注目値がある。

第四 男女の風儀との關係

男女の風儀は、次に起る大問題である、何となれば反對者は此の點に於て最も有力であるからである。その實この方面の證據を擧ぐることは至大の困難を有するものである。避妊法を一般に知らしむるときは、未婚者の貞操を弛緩するの傾向がある、それにまた夫婦の間柄が賣色關係となるの恐れありとは、正統派の道德論者によつて提出される抗議である、そして右の結果は、結婚を神聖視するの風を減じ、従つて

離婚の數を増加するに至るのである、また避妊法上の不注意によつて起る過失の爲め墮胎を起すに至る例も増加すべしとは、その抗議の要點である。

右の如き説を立つるは極めて容易の業であるが、之を證據立てたは否定するはなか／＼の困難である、統計上の證據を手に入る、前に、先づ右様の説を爲すものに對して問ひたいことがある。彼等果してホースレー卿の如く暫く坐して今日の道德標準と三十五年又は其以上前のそれと比較したことがあるかと云ふことである。本書の著者の如きは餘り多く世間を見たものではないが、今日まで讀みまた聞いたところによつて察するに、一代又は二代前の男女間の風儀は、その名目こそ嚴格なれ事實は却つて今日ほど嚴格でなかつたやうに思はれる、今日は男女共に公々然と兩性問題を論じ、また風儀の墮落を公然認